

十月

本格興行

文楽座  
人形淨瑠璃



文楽座 四ばつじ

一部 金十五銭

# 乍憚口上

晴れ渡る秋空に金風そよかに寔に快き候皆々様には彌々御機嫌お置はしく被遊慶賀至極に存上ます。偕て當文樂座十月本格興行は一座總動員、大熱演にて狂言の儀も秘藏の傑作集殊には常磐津の釣女を淨曲の裡に取入れ、新鮮味豊かに錦繡の秋と美を競ふ郷土藝術人形淨瑠璃の御鑑賞には又となき好機會に御座ゐますれば何卒賑々敷御來場御批評賜り度希上ます。

十 月

四 ツ 橋

文 樂 座 敬 白

昭和十一年十月三日初日

每日 午後三時開演  
初日 午後二時開演  
二日目

### ・御觀覽料・

一等席 御一名 金二圓七十錢  
(お座席五十錢上り)  
二等席 御一名 金一圓二十錢  
三等席 御一名 金七十錢

一階お座席は五日前より  
一等席

### 前賣切符發賣致居候

前賣切符 南⑦四七一一番  
專用電話  
一般御用 南⑦三〇三二番  
の電話 南⑦三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまま御入場出來ますから御便利で御座居ます

豫定時間表

文樂座人形浄瑠璃  
十月本月格興行

花はな競くらべ四し季き壽ことぶき

幕間 十分

二月にがつ堂どう良りょう辨べん杉すぎ由ゆ來らい

幕間 十五分

御ご所しょ櫻ざくら堀ほり川かは夜よ討うち

幕間 十分

紀國屋小春きこくやこはる心しん中ちゆう天てんの網あみ島じま

幕間 十分

釣つり八はち時じより十じゅう時じまでまで女おんな

打出し

十時十分より十時四十五分まで





四季 壽

花競四季壽

(床本) 花競四季壽

豊竹駒太夫  
豊竹和泉太夫  
竹本播路太夫  
豊竹竹太夫

景事として夙く文化六年二月の御  
靈社内の芝居に上演せられてゐます  
春は萬歳、夏は蟹の汐汲、秋は關寺  
小町、冬は鶯娘の四段返して優雅な  
所作模様として初春にふさはしいも  
のであります。

竹本相瀬太夫  
鶴澤清二郎  
野澤百左  
野澤八造  
鶴澤友鶴太駒  
鶴澤友廣二  
豊澤仙三郎

これは百四十年前に三代目鶴澤友次  
郎(通稱松屋清七)師の作曲で其後  
三代目野澤吉兵衛師が改訂をし五代  
目友次郎師の時に至り毎年正月二日  
一門相集り式三と共に弾くのが吉例  
となり現六代目まで約六十年間の慣  
例をひいたもので今日鶴澤宗家十種  
の内にあげられてゐます。

まづ初春のあしたには、門に松立、  
壽を祝ふ鬘斗目や、のし昆布、千  
代と譲り葉あざやかに告げて行らん  
鶯の聲も長閑き春のそら、實に九  
重の、賑々と、いつまでつきぬ竹本  
の其一節の世を込て幾萬歳と祝ひけ  
る。徳若に御萬歳と御代もさかへま  
します、愛敬ありけるあら玉の年立  
かへるあしたより水も若やぎ木の目  
も咲き榮へけるは誠に目出度候け  
る。やしよめ〜京の町のやしよめ  
賣つたるものは何と、大鯛小鯛鱈の  
大魚ヲ鮑さどい蛤子〜蛤々蛤  
見さいなと賣たる者はやしよめ、そ  
こを打過側の棚見たれば金襴緞子、



ナ、浮名を流すサイナ〜その心  
はあさり貝、誰かは我を止むらん、  
此關寺の草の戸を明くれ昔戀しやと  
思ひし事も又昔となる、百年の姥が  
身の恥かしやとて、市目笠おほふ日  
影や吳竹の杖にすがりて、よろ〜  
〜と立出見れば逢坂の關の清水に  
影うつる、老の姿のア、ア、  
恥かしや、彼深草の少將の雨の降夜  
もふらぬ夜も風の吹夜も吹かぬ夜も  
思ひにきへし其報ひア、我實古へは  
花の姿といはれしも、いつの間にか  
は衰へて、生者必衰の理りは只目の  
前と恐ろしや、因果は廻り車のしど  
に百夜通へど空言を誠とおもひつも  
りしはさい生の山高く、生死の海深  
き其怨念の添やらん、ケ襟にものに  
狂ふぞやう、つらふものは、世の中

の人の心の花や見る、餘所の見る目  
は戀すりやゆかしいとしかはゆさが  
それが、眞實ならば、そのナなん  
〜情けのそれが誠か、てんと哲文  
二世三世、齎しへ、ほんに〜へ、  
浮が中にさ樂しみ心付て身繕ひいざ  
やとたつて、關寺の柴の庵りに歸り  
けり〜、忍ぶ山、口舌の種の戀風  
が吹共傘に雪持て積る思ひは猶も幾  
重か重る思ひちらす、外山の雪をく  
ゆらす、炭釜に冬籠りせし一枝を春  
待顔に初花の咲かけんとやちら〜  
と梢に宿る白鷺が霜毛を脱て羽たゝ  
きの、雪は花より花多き六つの花び  
らちらり〜扶かざしてしほらしや  
白雪の〜はら〜降りつもある  
花と見紛ふ雪や氷を見ながらも袖を  
かざして立寄ればそれは木々の花切

くべて樂まん、酒にいさや遊ぶらん  
四季目前に有難や、雨土恵みの青人  
草の〜盡せぬ眺めぞ樂しけれ。



二月堂良辨杉由來

成立つてゐます。

(床本) 志賀の里の段

M 宇治は茶所茶は縁所 宇治にお

とらぬ志賀の里、野面瀬も畑も一樣

に、赤い障に手拭も、思ひ思ひの紅

しぼり、一番つみも早過ぎて、二番

中ばの卯の花や、空に一聲時鳥、泣

きつる方のゆかしさよ、都の雲井い

つしかに、近江に住居寫繪の、夫に

は去年にみまかりて、何を便りに渚

の方、忘れがたみの若みどり、蝶よ

花よもかし付の、めのどがかざすひ

がら傘、茶籠を手んでに茶つみ歌、

君とならんで茶の目をつんで、木々

の露やら涙やらヲ、しよんがヘヲ、

〱 調ふ聲かしましく、若い女中の

お手車、腰元ふじのが手をつかへ、

志賀の里の段

竹本大隅太夫  
竹澤團六  
鶴澤友太郎  
鶴澤可太郎  
野澤市之助  
鶴澤寛之助  
豊澤重二郎  
八重二郎

人形

渚の方  
一子丸  
乳母小枝  
こし元藤野  
こし元春枝  
吉田文五郎  
桐竹紋玉昇  
吉田玉七  
桐竹紋玉七  
吉田文之助

この「良辨杉」は加古千賀女の作で、豊澤團平師の節付であります。千賀女は團平師の妻女でこの他にも「靈驗記壺坂」の力作があります。「良辨杉」の初演は明治二十年二月の彦六座の手欄に掛けられたもので初代豊竹柳道太夫、三味線豊澤廣作後六世廣助師に創まつたものであります、其後歌舞伎へも移入せられ雅趣豊かな至難の名曲として傳へられて来たものです、只今では古靱太夫の極め附となつてゐますが、古靱太夫の初演は大正十年五月の御靈文樂座で線は故三世清六でありました。全段は志賀の里の段、櫻の宮物狂の段、東大寺の段、二月堂の段から

けふは一入空も晴々、お前様にも殿様此の春お別れ遊ばして、嘸や明けくれお淋しかると、云ふをめのとの小枝が摺寄り、ほんにふじのいふ通り、まだ三十になるならず、後家にお成り遊ばすは、モ、よくく殿御に縁うすし、マアおいとしぼやと兩人が云ふをかはして渚の方、これはしたりそなた衆は、女の道を知ずかや、譬へ二十は愚かな事、十五夜月の振袖も一度殿御に別れては、後を守るは女子の道、まして、光丸といふ家の世繼成人させて、夫の跡相續さするがわらはが役、必ずく仇口にも、たわむれ事を云ふまいぞやと、委心も立増る、遠が官家の舊臣に、水無瀬左近が妻ぞかし、腰元共は顔見合し、手持無沙汰に見へに

ける、めのと小枝が取りなして、奥様の仰せの通り、それに付ても三年前、殿様茶づみの御慰み、御酒宴長じて奥様が、舞の一さし金地の扇は、コレ今若様のお持遊ばす御かたみと、云ふをふじのが摺寄つて、三年の昔思ひ出す、殿様への御とむらい、二つには又、若君様の御成人、壽ぐ爲の未廣にて只一さしと御前に進め申せば渚の方、殿様在世の御物好、何も佛の御供養と、仰にふじのは心得、花毛せんを敷きつらぬ、其身も俱に膝に手を、聲はり上げて其歌に、なまめくや今も昔の男舞、かへすや袖の折もよく。さす手引手におのづから、あの山見さい、此山見さい、明ぼのほふ、紫の、其面影の先ん殿に、似たりや、愛盛り、

あつちくのゆびざしに、めのと茶園あつちこちといざなひ歩む其折しも弓手のひへの山嵐、俄かにさつと早風、打着毛せん茶籠まで、皆ばらばらと吹きまくり、あはやと駕く女中達、袖を目に當てそふくがうろたへ騒ぐ其中に、母は我子も案じられ、茶園の畦を一文字、はせくむる向ふへ山鷲の、羽風と共に若君掴み、空に飛び行く有様に、あわて驚き狂氣の如く聲を限りに追ひ廻せど雲井はるかに舞ひ上る、アレヨアレヨと泣き叫ぶ、母は元より腰元も、ほげ茶園も踏み越し飛び越へ泣くも泣かれずハアハット、其儘そこに身を轉び、空をにらんで返せ戻せ、光丸よく、天にも地にも一人子の、まして別れし夫の篋早うそなたを成

# 櫻の宮の段

竹本 綴 太夫  
 豊竹 呂 太夫  
 竹本 源路 太夫  
 竹本 むら 太夫  
 豊竹 千駒 太夫  
 豊竹 駒尾 太夫  
 竹本 松島 太夫  
 竹本 土佐 太夫  
 豊澤 新左衛門  
 鶴澤 友造  
 鶴澤 友平  
 豊澤 團伊三

人させ、水無瀬の家を起さんと、母が思ひもエエ水の泡、けふから一人この母が、何樂しみにながらへる、譬へ此の身は、國の果て、深山の奥の谷の影千尋の底に沈む共、命の限り、こん限り、尋ねおふせて置くべきかと、姿形もあらしく、駈け行き給ふを右左、さゝゆる女中振切り、只手をあげて我子を返せ、悪鳥よ、つばさもくされ、はしくされ、返しくされと泣きわめき、心亂れて行方も何國を當と當途なき、雲井目がけて一さんに狂ひ行くこそ哀れなり。

(此間三十ヶ年後)

(床本) 櫻の宮の段

見渡せば大江の岸の春霞、四方

の浦へ寄浪に、ちらちらと散花の、たなびく雲とうたがわれ、鳥居も花につままれて、色香櫻の宮柱ゆをがぬ御代の花遊山ふくべのさゝに千鳥足、扇をかざすざゝんざや花を目當に花を賣、娘盛が花かんざしを、わらをつかねて青竹さして、赤いけだしの裾からげ、手笈手品もしほらしく、人を集めて立留り、サア、めせよ花かんざしを、いとさま方のかほよ花姿、すうわり撫し子の末をゆたかに富貴草、サア、さ、さ、めせとぞ呼にける、折もひよかひよか吹玉や、しやぼん玉や吹玉や、吹けば五色の玉が出るいと様方やぼん様へ、鳥渡手見せの千成やふけ、色玉や、伊勢に名高きお杉お玉、目玉ひよつくり玉

(鶴澤友太郎)  
 鶴澤新友太郎  
 (鶴澤清友)  
 鶴澤市松友

人形

花 賣 娘 桐竹紋太郎  
 吹 玉 屋 吉田玉徳  
 渚 の 方 吉田文五郎  
 里 の 子 大 ぜ い  
 村 人 大 ぜ い  
 船 頭 大 ぜ い

「丁ちゃん、玉小玉、エ、龍宮城ではふ  
 はいの玉品玉お手玉さがり玉、下り  
 玉とは何ぢやいな、いふてはひよつ  
 と呵られる、構はぬ〜〜言うて  
 んかそれは私もこのもしい人氣玉で  
 はないかいなサア〜サ、〜、  
 買たり〜買しやひせ、玉屋〜と  
 呼あるく、亂れてしかひもあらしの  
 いたづらに、空心さへ現なき、夢に  
 も夫と面影の、忘れかねたる恩愛に  
 燒野の雉子夜の鶴閉くさえ鳥のうら  
 めしく我が古里も志賀の里、迷ひ出  
 たる渚の方、姿もふりも見るめさへ  
 縫の小袖もきれ〜に、現心の亂  
 れ髪、櫻が枝に葉草履、ぶら〜  
 くと迷ひ來る、跡に大勢里の子が  
 ヤア氣遣ひよ法界よ法界よ〜〜  
 と、追つ廻しつ來りける、コレ〜

子供衆、アノ光丸は何とした、なぜ  
 さそふておじやらぬぞ、伯母がよい  
 物おまそうぞ呼でおじや連ておじや  
 サ、〜、〜、呼んで〜と泣沈む、  
 見るに不便と里人が、寄集りて、コ  
 レ〜女中、こなたは何で其様に、  
 氣をとりのぼせていたわしや、心し  
 づめて其わけをと、言ふにこなたは  
 むつくと起、アレ〜〜アレ〜  
 ソレ〜〜、今の羽風はあり  
 や誰じや、わしぢやエ、忌はしや情  
 けなや。其驚故にいとし子を、雲の  
 あなたへアレ〜〜、花吹木々の  
 梢さへ、鳥のやどりの恨みしや、雲  
 井の月もモウいくつ、十三七ツ七織  
 の、今度京へ登つて、守りのせいで  
 其守り、小像如意輪觀世音、なぜい  
 とし子の行先を、知らぬと云ふて濟

かいな、守りと云ふはねんねこの、  
ねんねが守りはどこへいた、山へ鳥  
が連てゐた、跡には何が篋ぞや、で  
んく太鼓ふりつどみ、廻れ廻れ風  
車、母が涙に張乳の残して嘸や夜も  
晝も、泣聲空にソレソレ、  
アレソレソレソレソレ、と、伏轉  
び、あなたこなたへくるソレソレ、  
くるりくるりと青柳の、風に亂れて  
川の面、あなたこなたへ泣叫び、當  
途も浪の川上へ、さまよひ行かば思  
はずも、我佛の水の面、かはり果  
てたる顔のなみ、ふつと氣の付き渚  
の方、ハア爰は所も何國ぞや、ア、  
浅ましましや、姿形のかわる迄さ  
まよひあるく愚かさよ、我子は既に  
荒鷲に、命を取られ其時に、何國の  
果に亡骸も捨たる事さへ今更に、思

ひ廻せば幾歳を、さまよひくらす恥  
かしさ、せめて我子の菩提の爲志賀  
に歸りてさまをかへ世にあじきなき  
身一ツを、墨の衣に障滅の、後世を  
佛に仕へんと、心定めて立ち上り、ノ  
ウ、船人乗てたべ登りの船よ舟人  
よと、呼ばよりくる登り船、サア  
く、櫃へ乗給へと、とりく乗せる  
引舟の中に市人四方やまの咄しに何  
と奈良坂や、今東大寺の大僧正、良  
辨と云ふ聖こそ、稚い頃に鷲と云ふ  
大きな鳥にとらはれて成人の後廣大  
の學者の聞へ世に高しと、人の噂も  
其身には、耳を貫く親心、現心の  
夢さめて、思はず聞しほだし草、今  
は何とて暫しさへ、爰に心も濱千鳥  
飛で行きたき心さへ身は儘ならぬ登  
り舟、牧方裏と見るよりも、船を頼

みてつくぐと、南都さしていそぎ  
ける。  
（床本）東大寺の段  
M 名に高き名も南都の太極院、時  
の帝の勅願所、宗法廣き東大寺、玄  
關前の切石に、影をとどめし、打水  
に、引しぼりたる紫の、幕も雲か  
といと尊き、大門前の下馬札に、乗  
はなしたる馬廻り、供侍の諸士従  
の者、武家公卿の御代參、出入も重  
き盛砂に、門前狭しと待居たる、老  
の身の昔の姿いつしかに、我にもあ  
らで幾とせを何國の浦に吟ひし、亂  
心の夢覺て、夫ぞと思ひ人づても、  
心の儘に奈良坂や、漸爰に渚の方  
大門近く歩みより、枝をとどめて一  
人言、淀の渡りの船、中にて人の

東大寺の段

豊竹富太夫  
野澤喜代之助  
竹本長尾太夫  
鶴本寛市

人形

雲彌坊桐竹門造  
渚の方吉田文五郎

噂にはるくくと、又さまよふて漸と來る事は來ても淺間しい、乞食非人の何として、誰にたよりに問事もこぼれ、心細やと延上り、見廻し〜そこ愛と、寺門の様子餘所ながら、伺ひ見れどおごそかに、寄付事も淺間しき我身の様に氣おくれし、思案もいづる涙さへ、胸にせまりて居たりける折から寺の門内を小足に急ぐ伴僧がこなたへ歩み來かゝるを、見るに嬉しく老女は驅けより、おづ〜前に這かゞみ、卒爾ながらお見かけ申しわりない御無心、お情けと云ふ伴僧立留り、ア、コレ〜つかしやるな非人殿、お上人様の御用で四條迄急ぎの御使心がせく、殊更愚僧は今爰に持合せもござらぬ程に跡でくりの男に言ひ付お鉢落しを貰ふてやる、

そこ退しやれと行過る、袖を控へて手を仕へ、ア、イエ〜私がお願ひは御報謝お手の内ではござりませぬ憚り多き事ながら、私は近江の國志賀と申所の者、二歳の男子を鷲に取れ、我は其儘狂人と成り所々方々とさまよふ内、此程淀の渡りにて乗合人の噂には、南都東大寺の良辨大僧正様は稚い時鷲に取れ助かり給ふ御方と、聞に付ても心の迷ひ、斯程尊き御方の我々づれの子ではないと思へど暗れぬ親心、どうぞ御慈悲に僧正の御身の素性御存じなら、お聞しなされて下さりませと、言ふも涙の雨やさめ、歎き頼むぞ哀れなり、伴僧つく〜非人が体打詠めて、不審顔、ヲ、成程々々おことが今の物語りも微塵違はぬ御上人様の御身分

聞けば聞く程笑止な事、去ながら我等も日毎に御顔は拜せ共、なか〜お傍へ出る事叶はず、先づ傍には御用人近習茶子性お取次、關白大臣御攝家方、御目通りは白書院又黒書院對面所なか〜近よる事ならずと云てこなたの歎き、夫とはなしに餘所ながら、お尋ね申すよい思案がコウツト待しやれや、何と工夫があれかしと、丸いあたまを右左り、ふり廻し丁と手を打ち、ヲ、思ひ出した〜、扱も智慧かな、サア分別かな是より外に思案はないわい、エ、僧正様には御役目にて日々春日の御社へ御禮拜を遊ばすじや、其御下向には二月堂お禮が濟めば其昔、鶯に取はれあやうくも梢にとまりし折も折前僧正の通り給ひ、お助け有し杉の

木へ日毎に參詣遊ばす故、こなたの身の上そふして又鶯に取られた我子の様子、委しく書てな、杉の木へ張付置ば、お目にもとまらふ、モ是より外に思案はないと、人を助ける出家にていと念頃に氣を付れば、老女は嬉しく手を仕へ、斯見苦しき老の身を不便と思し下されて、御親切なる御心添へ、有がたふ存じます、したが紙硯又筆の用意も有ばこそ、元より老のよする浪、文字の分ちもやつれば、何をよすがに書留ん、心細さと打しほれ、歎けば伴僧打うなづき、成程尤もげに斷り、ア、わしも思はぬか〜り合、ヲ、よし〜辛ひ矢立に紙も有、わしがこなたに成りかはり委しう書てやりましよと氣もわき〜と懐の紙に委細をさら

さらと筆に情をふくみ墨、書認めて手に渡し、ツレ今言た通り杉の木の元へべつたりと随分お目にとまる様張付けて置つしやれ、しかしこ〜した坊主が書た教へたと必ず人に言ふまいぞ、エ、勿体ないお情受けた其上に、お世話に成り、死でも御恩は忘れませぬ、エ、有難ふござります〜と、嬉し涙にくれ〜も悦び勇めば、エ、何のいふ、袖ふり逢も他生の縁、縁だにあらば又重ねておさらば〜と伴僧が、引別れつゝ老の身の心の、やるせ竹杖に、力もなげにたど〜と、二月堂さして歩み行く。

(床本) 二月堂の段

M やかず共草は燃なん春日野の三

二月堂の段

切豊竹古靱太夫  
鶴澤重造

人形

良辨上人 吉田榮三  
渚の方 吉田文五郎  
先供 吉田玉徳  
弟子僧 大ぜい  
供廻り 大ぜい

笠に近き木の間より、いらか重ねし  
二月堂、利益もふかき御佛の軒に見  
上ぐる葉も枝も、良辨杉と名に高き  
されば良辨僧正は、日毎の御禮  
拜、早先共のせいし聲、網代の輿の  
おごそかに、近習の侍そば法師、  
かしづき随ひ、ゆうくと春日の社  
禮拜し、續いて御拜二月堂、思位も  
高き石垣やをひろいなる緋の衣錦  
の袈裟をかけまくも、空なつかしき  
杉木立、御手にかゝる露涙、水晶  
の玉さらくと、いと殊勝なる御祈  
念、御手をとどめて生茂る杉の梢を  
ながめ給ひ、ハ、誠や、人界の生を  
受け、生長なすも父母の恩、夫に付  
ても我身の上、何國の誰が種成か、  
稚き時鷲に取はれ、此大木の梢の空  
小枝にとどまり危ふくも、既に悪鳥

の餌食にと、引裂れなん其折から、  
師の僧正の御情をうけ、命助り剩  
さへ、忝くも内裏にて、御局方の  
助力を以て、成人なせしも師の厚恩  
月日も既に三十歳の、今に父母まし  
ますか、便りも聞ず音信も、なきは  
此世にましまさぬ、父母なれば未來  
のため、此世におはさば息災延命、  
何卒佛陀の妙助にて、一ト度逢せた  
び給へと、年日頃祈れ共、そよとの  
風の便りさへ、涙の乾く隙もなく、  
鳥にはんぼの孝もあり、鳩に三枝の  
禮も有る、我は關路の玉よび生れ  
ぬ先の父母も、空なつかしきはかな  
さよと、衣の袖にふりかゝる露の涙  
の玉散て餘所の見る目も痛はしき、  
僧正涙押拭ひ、何心なく木の元を  
見やり給へば、こまくと文字のあ

いろ白紙の書記せしに御不審まし  
く、テ心得ぬ、一方ならぬ此杉は  
石持て廻りに垣なす愛樹、誰が書物  
をはり置し、いと不審なり、兎も角  
も書物は是へと仰の下り、はつと近習  
が差寄つて、手早く取て御前に恐入  
つてさし出す、僧正御手に取せ給ひ  
御心中にて繰返し、御不審顔にいか  
に者共、此書物を張置しは何者成る  
ぞ遠近に、心を付けて尋ねよと、仰に  
近習は手をつかへ、ハ、ハ、去候  
先程より此邊り、心を配り候へ共、  
人影逆も候はず、があれに一人見苦  
しき老女の非人罷り有る、彼より外  
に人もなし、そも何事の御尋と、申し  
上れば大僧正、苦しからず、其老女  
是へ〜と宣へば、人々顔を見合し  
て、いかゞと斗り立兼ねるを、僧正

重て聲かけ給ひ、ホ、ハ、ハ、其方共が  
心遣ひ道理道理、さは去ながら常日  
頃今も語りし我身の上此書物に露い  
さゝか、尋問べき仔細有り、心な置  
ぞ呼來れと、仰にはつと立上り、非  
人が前に歩み寄り、コリヤ〜非人  
あれに御渡りましますは、忝なく  
も南都一、聖武帝の御歸依僧、東大  
寺良辨大僧正にて渡らせ給ふ、然る  
にいと淺ましき其方に冥加至極の御  
詞かゝり、何角お尋の仔細有り、御  
前へ參れと權柄に云はれてはつと驚  
く老女、兼て覺悟も今更に、胸騒が  
れて兎や斯と、後ろ見らるゝ心にも  
なつかしさも先達てふるふ足元踏し  
め〜、やう〜杖に取總り、御前  
間近く蹲る、僧正御聲しとやかに  
そな者は、苦しからず近ふ〜す

〜むべし、思ひがけなく呼出し、嘸  
迷惑に思ふで有ふ、其方一人此所に  
居合しけれ〜ば幸ひなり、此書付を  
木の元に、張付置しを見留はせぬか  
いかなる人か知らざるや、聞かまほ  
しやと僧正の仰せにはつと頭を下げ  
流るゝ涙押拭ひ、ハア、恐れなが  
ら其書付け、もし御目にもとまらふ  
かと張付け置しは淺ましい、身の罪  
科を願す、此非人のば、私たし  
ござりますと、云ふに僧正驚き給  
ひ、思はず御足を進ませ給ひ、此書  
付の表には、稚き男子を驚にとらは  
れ、其子の行衛を長の年月、尋ねあ  
ぐみし者とやら、我身の上に似かよ  
いし御身は何國の人成やと、仰せに  
老女は手をつかへ、申上るも面ぶせ  
わらは事は其昔、官家の舊臣水無瀬

左近元治が、妻の渚と申す者、仔細  
 有て勤仕を辭し、夫の所領近江の國  
 古郷の志賀へ移り、夫婦が中に男子  
 を設け、悦ぶ甲斐も情なや、夫は病  
 に此世を去り、忘れ篋のいとし子  
 の、成人するを指折て、末の榮へを  
 樂しむ内、頃しも卯月の茶摘時腰元  
 はした打連れて、茶摘の手業野狹の  
 遊び、時しもひるの山嵐、どつと吹  
 來る早風、比良の方より一文字、  
 山麓來つて我子を掴み、大空目がけ  
 飛行をやらじと追へど鳥は早、霞に  
 隠れ稚子の聲も幽に行方のなき悲し  
 みに、そこはかと、人目も何の形ふ  
 りも、後も姿も夢うつゝ、子故に闇  
 に氣も亂れ、凡年月三十年、御覽の  
 通り老の浪、頭に白く置霜の、影  
 に氣の付水の面、亂れ心も納りて、

古郷へ歸る淀川の渡りの船にて噂を  
 聞き恐れ多くも、僧正の御身の上を  
 承はり餘りよふ似た物語り、伺ひ  
 申すも女の愚痴、子の行方に迷ひぬ  
 る身は野あらしのかぐし共成果こが  
 れ死る身を、不便と思したまはりて  
 身の罪科を赦してたべ、まだ夢覺ぬ  
 あだ浪の狂女のくせと御赦しを人々  
 よきにお執成、訛してたべとどぶと  
 伏し人目も恥ず泣き居たる始終の様  
 子聞こし召し、左こそと思し僧正も  
 玉ちる露の御涙、老女が心、思ひや  
 り、暫し仰もなかりしが、やゝ有つ  
 て御目を拭ひ、そなたが今の物語り  
 親子の恩愛ハア左こそ有ん、我身に  
 つまされ思ひやる、ア、嗚や父母上  
 も、そなたの如く思し召し、迷ひ給  
 はん勿体なや、餘所にな聞そいたま

しや、我身の様に思はれて、衣の袖  
 を絞りしぞや、シテ、其時稚子に  
 後の印に成べきと思ふ品だに有るな  
 らば聞まほしやと有ければ、老女涙  
 の目を拭ひ、コハ勿体なき御仰せ、  
 世にも似よりし御身連、冥加に餘る  
 其お詞、譬へ此儘子の行術、分らぬ  
 逆も僧正の、情の御意に預りし、是  
 を此世の思ひ出に、我子の纏、諦め  
 ても、證據の品も有ならばと又も迷  
 ひぬる親心、そも淀川の渡りよりた  
 どりく、参る道、印に成べき品も  
 やと思へど心定めなき、何をしよう  
 とのよすがにも亂れ心に黒髪も、枯  
 野の霜ときへ果て月日の數も辨へぬ  
 年月既に三十歳の、只何事も忘れ  
 今まだ夢の心地ぞや、思ひにせまり  
 胸つぶれ、只湧出る涙より外に思案

も、エ、出やらぬ、浅ましきよとふし轉び足摺してぞ泣居たる、僧正始め人々も、貰ひ涙に落草の露をましたる風情なり、老女ははつと起直り實思ひ出して候なり、鶯に取れし稚子の、背なしの緒の後紐、末長かれと結びさげ、守りの中の尊像は、水無瀬が家に傳はりし、一寸八分の如意輪觀音、是より外に何一つ、覺へし事も御座なしと云ふ、扱はと僧正、いとしや遅しと御胸にかけさせ給ふ、かけ糸も親子の縁の深みどり錦の守り取出し、老女が傍へ立寄り給ひ、そなたが只今申されし、錦の守りはもしやそも此品にて有ざるかと差し出し給へば、老女は一目見るよりも、やれ、有難や忝なやと手を合したる嬉し泣、ア、そも此錦

は其昔、夫左近が主君より、拜領なせし空蟬と云そゝだきの、香の包を其儘に、夫が物ずき、自が、手業に縫し守り袋、かゝるしるしの有からは、ムそんならあなたがそもじかと見合す顔にばら、思はずしらず僧正も、御手を取て縫り付、歎き給へば落の方、人目も恥ず抱き付喰縛りてぞ泣給ふ、僧正母の御手を取り、頭に戴き御背を撫、ア、勿体なや、冥加なや、長の年月我故に、御身を苦しめ奉り、古郷の空の御住居も迷ひ出させ、都々浦々乞食非人と成給ひ、人の軒端や野に山に彷徨ひ給ふ夢にだに知らぬ事とは云ひながら、現在母は、物もらひ、子は僧正の聖のと人に侍き敬はれ、網代の興よ緋の衣錦の袈裟を身にまと

ひ、是が大寺の權者のと、云れふ物か浅ましや、如來のお目に見給はゞ野末のいをの瘦法師、軒瑞の非人法師にも、劣ると云ばまだな事、鳥獸に劣りたる不孝の罪は幾重にも、御赦し給へと大僧正、兩手を土に、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、アつけ給へば俱に付添人々も敬ひきやうじ奉る、僧正重て母の慈悲にて我生國只今知る上からは、江洲志賀に一字を建て、有難き尊像を大像如意輪觀音の、御腹中に納奉らん、今日親子對面は、私ならぬ佛の導き、佛の誓ひと母の恩、重きを以て、石山寺と號べしと、仰せは今に近江路や誓ひあらたの御寺は、此僧正の建立なり、母君涙押拭ひ、ハ、ア悦ばしや嬉しやナア、かゝる尊き御身にも

血筋の母と思し召し、斯淺ましき身のさまも、御身の穢れも思さらで、親子の名乗下されし、情は生々忘るまじ、ア、親成ればこそ、子成ればこそ、かゝる聖を子に持し、母は勝れし果報者、無事に逢見る嬉しさに長の苦勞も忘れし思ひ、今は心も暗て行く、古郷の志賀へ立歸り、我も委を墨染の、草の衣になき夫の跡念頃こころに申はん、御寺建立有迄はさらばくくと立給へば、僧正驚き御袖の見るもいぶせき破衣を、兩の御手に引留給ひ、曼曼花増りの親子の對面、暫し成共良辨に、孝道立させ給はれと歎きたまへば人々も、しらぬ事連僧正の、御母君とは露知らず、無禮の段々幾重にも御赦し有て僧正の、仰の如く御寺へ一ト先御供仕

らんとすゝめ申せば今更に、長の年月あこがれし、我子のほたし人々のすゝめも餘所に捨兼て、杖を力に立給へば、僧正御杖手にとり給ひ、其御姿でおひろひ、後めたくも思されん、恐れながら此興へと仰せに母君驚き給ひ、アノ光丸殿、イヤ僧正様の、ホ、ハ、ヲホ、ハ、ハ、わつけもない、かに血筋と云ひながら、勿体ない此興へ、どふマア足が入られう、ハア、赦したまへと辭しければ僧正涙に母君の顔つくくくと見給ひて、ハ、ア誠や往昔釋尊の、父大王の亡骸は、自興を昇ぎ給ふ、今良辨も母君の、御興を昇ぐべき行なりに、御身の穢れを取給ふは、皆是良辨がなせる罪、何卒御赦し蒙りて、此儘興へ御移りと、人々立寄り、乘

參らせ、痛はり、侍き僧正は御堂を見返りふし拜み、杉の梢も、雨露のおん、恩と情の親心、恵みも深き二月堂、日頃の愛は木の元に、悦び榮ふ孝の道顯れ出る、彌陀の慈悲、廻りくつて末の世に南都大佛乾の方子安の神と名に高き今に其名ぞかんばしき。





巻五

次 御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

辨慶上使の段

中 竹本文字太夫

豊澤 廣助

切 竹本津太夫

鶴澤 綱造

人形

郷の君 吉田文之助

侍従太郎 桐竹政龜

妻花の井 吉田小兵吉

こし元しのぶ 吉田文作

女房おわさ 吉田文五郎

武藏坊辨慶 吉田玉藏

こし元 大ぜい

元文二年一月竹本座に上場された文  
耕堂、三好松洛の合作になり、全五  
段ものでこの『辨慶上使』は第三段  
目であります。作全体の内容は、梶  
原景高、土佐坊昌俊の二人が源義  
経の間罪使となつて上洛します、梶  
原は義経を陥れて、己れの非を蔽は  
んとす魂膽、土佐坊は是を知つて、  
義経を庇護せんとす心、かくて二人  
の入洛によつて、義経主従とこの二  
人の間に様々の葛藤波瀾を起す次第  
で、この辨慶上使の段の梗概は左の  
通りです。  
義経の室の郷の君は平時忠の娘

であるところから頼朝は若し義経  
が平家と通じて居らぬれば郷の  
君の首打つて渡せとの難題を殿命  
します。郷の君を預る侍従太郎の  
館へ首切る役の上使は辨慶で、主  
の爲には娘の首を打て頼朝の疑念  
を晴らすが得策と考へてきたが、  
郷の君の美しい御氣色、殊に御懐  
胎の様子を見てはそれも忍びず當  
惑してゐるとき眼に付たは腰元し  
のぶであつた。しのぶはおわさの  
娘で郷の君に瓜二つの容貌に打喜  
んだ、おわさの述懐から、辨慶が  
まだ、書寫山の稚兒時代本陣の娘  
と月待の夜假寝の契を結んで懐妊  
した子供が信夫と判つた。辨慶は  
お主の身代りに我子を一思ひに刺  
し、始めて遭ふた我子に敢ない別

れをするといふ情懷つきぬ好箇の名作です。

(床本) 辨慶上使の段 (中)

天下る雛にはあらぬ卿の君雲井を出ていづこかに義經公の北の方となれて榮ある武家の妻、殊更に御懐胎御腹帯の祝儀も相濟お上屋敷は公の事しげく御心にさはる事もやお乳人侍従太郎が館にはしほし假居の先きくまで公家武家方の見舞の使者、前門市をなしにける。腰元はした花の井も卿の君をなぐさめんとはじき石など糸取や千草むすびの戯れ事、紙寄の先に名をしるし互に引て結び合、コレ見や角彌、そもじと手越の伊兵ヲ、おかし、龜井と鶴尾は長生の水波親父と信夫どの、ヲ、いやら

し鶴尾殿次は誰じやと引開く、花の井武藏と縁むすび是はふしぎと手をたゞき一度にどつとヲホ、ハ、打笑ふ残りの二本は誰なるぞと開き見れば神かけた義經様と御臺様お嬉し様やとばかりにてそやし立たる姦しさ、卿の君もおもはゆくコレ轉合言やんな花の井の手前もあると口にはわざとすげなくて心の内の嬉しさはほにあらはるゝ御所櫻、雪に少しの紅桔梗言はねどさすが大内の育とこそは見へにけり。花の井は和らかにイヤのふ昔の衆や、あなたは大事のお身なれば澤高にものを言ふまい、コレ靜に〜と制しとむる其處へ爰に腰元、信夫が母おわさと言ておもの縫い御機嫌の伺とて會釋をこぼして入來ればそれと見るより花の井

はヲ、おわさかよふこそ〜あがられし、けふはことなふおさもしそふなゆへ、誰をがなお伽にと思ひしにヲ、嬉しや〜イザとて御前へすませば卿の君は打笑みたまひヲ、おわさ此程は何として見へざるぞ、定めて四方の紅葉を見に、嘸面白き事ばかりうらやましや、と宣へば、ハア、御意の通り高尾梅の尾、嵐山わけて、今年は稻荷山の薄紅葉がいつ〜よりも見事なと、世上の噂がそれもほんに〜針のみづで聞くばかりあなたからは早ふこい、此方からはとふこいと參るも〜紅葉見の晴衣小袖の仕立もの、夜を盡に京田舎が打交つてモそれは〜賑やかな秋でござりますすがなが、是と申すも義經様が平家の大敵を打亡し此都に

ござなきさるゝ故じやと申すをきけば  
弓も引き方とやらでモ嬉しいやらお  
目出度やら早速お悦びに上りませふ  
がけふよあすよと思ふ内、御姫様の  
お帯のお祝も濟だのに、なぜに早ふ  
くお悦びには參らぬぞ、とアノ娘  
からしかつておこしました文をろく  
くに見るや見ず、何も角も捨置て  
取ものも取あへずお悦びに上りまし  
たが、又何ぞお土産が上ましたいと  
存じますれど、けつこふな者はあな  
た方には有あまり、ほんの心斗りに  
て、せめて是をと袂より帛紗包を取  
出し是はかいばと申して文字で書け  
ば海の馬と言ひますげな、がめんよ  
ふ稀代の御産のまじない、私が曾祖  
母が十九人、祖母はおとつて十三人  
母から私が手に傳へアノ信夫を産ま

でに一度も不覺の産をせず腹覺のあ  
るさゝげもの追付御産の月満て此  
海馬にひらりと召九郎判官義經様の  
若君は我なりと大手の門のさつと開  
き安々と御誕生お目出たや、ヲホ  
、、、ヲホ、、、、ほんにつべこ  
べくと長口上で息がはづむ、コレ  
く娘お茶一つ涙でても、ア、く  
しんどやとしやべりける。卿の君も  
おかしさかくしテモ氣輕にわさく  
もの言やるおわさとはよふ付たと袖  
打さゝえたまひける。かゝる所へ奥  
使ひの女中立出て君よりのお使とし  
て辨慶殿が見へましたと申上れば女  
中達サ、サ、サ、女嫌ひの武藏  
殿、ぬれかけていやがらせ、お慰み  
にはどふ有ふ、よがるくと立騒ぐ  
花の井制してイヤコレおわさ、そな

たアノ辨慶と言ふ人見やつたカイエ  
くついに見た事がござりませぬ、  
ヲ、そんなら次の間へ居てお見受申  
しや、身の丈は七尺五寸、大きな体  
にいがぐりあたま、必ず笑ふまいぞ  
やと咄す中より侍太郎一間を出て  
御前に向ひ、ハ、ア姫君には御安体  
今日武藏殿來たらるゝはいかなる事  
かしらね共、義經公よりのお使とあ  
れば、定めて御見舞の趣きならん、  
ア、イヤナニ腰元どもけふはいつも  
と違ひ、御上使の事なれば必ず廬相  
せまいぞと仰にハツト腰元どもさし  
控ゆれば花の井も皆くとともに出向  
ひ衣紋正しく待居たる。

(床本) 辨慶上使の段 (切)

ともに出向ふ程もあらせず入來るは

堀川御所に隠れなき智仁勇の其骨が  
 ら、忠臣の鑑とは唐土の豫讓我朝に  
 て其一人と呼ばれたる武藏坊辨慶へり  
 塗取て打かづき、大紋の袴ふみしだ  
 き、しづ〜と打通りむづと座して  
 一禮し、ホ、ウ存じたとは違てみづ  
 くとした御顔色、先安堵仕るま申  
 上れば卿の君ヲ、我君様にも御機嫌  
 能ましますかと、御詞有ば武藏坊、  
 ハ、ア其御仰の健さ、是と申も侍  
 従御夫婦の御介抱、御大切になさる  
 ム御苦勞のかが見へ、祝着に存る  
 よ、是は〜御挨拶、御主人ながら  
 御平産有までは、我館に預る卿の君  
 様、義經公の御前幾重にも御執成、  
 ア、イヤ〜執成には及ばぬ、總て  
 物事の執成といふはかなれ八合な事  
 を十分に言が執成、此辨慶それきら

い、見た通りを罷歸り、眞實に申な  
 ば君にも、嘸御満足、扱是は御夫婦  
 への咄しではない。後學の爲卿の君  
 様へ御物がたり、ア、惣じて勇士の  
 戰場へ趣く時は三志と申て忘るゝ事  
 三つ有、まづ國を出る時家をわすれ  
 境を過る時、妻子を忘れ、敵陣に臨  
 んでは我身を忘るゝ、婦人の懐胎も  
 先其如く、既に月滿、御産のひもを  
 解るゝは彼勇士の敵陣へかけ入て是  
 ぞ能敵ござなれ、還すまじと引組で  
 首を取るか取らるゝか、よい子を産  
 むか得産ぬか、生きるか死るか、生  
 死の境が爰をよく御合點なされ、か  
 ねてなき身と思召さば、其期に臨ん  
 で不覺をとらぬ、ヤ拍子に乗つて馬  
 鹿な事を、ハ、ハ、ハ、ヤ肝心の御内  
 談遅なはる、爰は端近密に御意得た

し、しかし、あれに見馴ぬ女、わり  
 や何者だ。ハイ、私はわさと申て、  
 是なる腰元信夫が母、卿の君様をお  
 見舞に、参りし者でござりますと、  
 言ふに花の井引とつて、今あの者が  
 申す通り、我家の奥勤めも同じ事、  
 憚りながらお心置なく御内談、ア、  
 イヤ〜かれを始め女中方、間を隔  
 て遠慮召れ、サア君様、奥方、侍従  
 殿、奥へ参らふか、イヤお通り御案  
 内と卿の君を誘ひて、侍従夫婦は先  
 に立、後に引添武藏坊、鎌倉殿の難  
 題をつい打明けて、言は得に、暫く  
 心奥の間に、打つれ伴ひ入りにける  
 年若けれ共惻濟もの、信夫差配しな  
 ぶ皆様、何事の御内談お隙が入ふも  
 知まいに、お盃でも出してはの、ヲ  
 、それ〜お煙草盆、お茶持て行ぞ

や夫はお慮外、次手にお菓子も頼ぞや、さらば此間にちよつとかか様、此頃はお顔も見ず、おなつかしやと立寄ば、ヲ、そなたも息災で嬉しい、明くれ傍に引すへて、見れどもあかぬ一人子を、手放して置親心、親なつかしと思ふより百千倍とはしらぬかや、たとへ御前の御意に入る共、必ず、朋輩衆をそでにすな、出かし立してそねまるゝな、林の中にも高い木は風が枝をば折ぞとよ、一人寢覺の度毎に、ためて置た數々もあへば嬉しうて口へ出ぬ、何をいふも身を大事に、コレ煩ふてばしたもんなど、手を取かはす親と子の、わりなき風情ぞ道理なり。やゝ有て侍従夫婦奥より出る屈託顔、おわさ目早く是は、二方様、どふやらお

顔の色悪ふ、お氣の浮ぬ御容体、御内談と申は何事でござります、と言ふに花の井差寄て、さればいふふ、今日武藏殿参られしは、義經公には叛逆人時忠の娘卿の君を妻と定め居るからは是同腹、一味でなくば姫君の首討て渡せと、鎌倉殿の御難題、おちいさい時から夫婦の者が手しほにかげ、育上げた姫君様、そもやお首が切れふか、何とやいばが當られふか、殊に只ならぬお身の上、辨慶殿も切衆て、とつゝ置つ思案の上、お身代りを立まいか、ヲ、夫ぞよろしき御分別、サ其かはりは誰彼とせんぎの上、年の頃みめかたち、相應した此信夫正眞の春に腹とやら、コレ了簡は有まいか、夫婦の續の苦しみを、思ひやつてと斗にて、かつば

と伏て泣ければ、夫も座したる膝を改め浮世の中の無心といふ、に見に上越無心も有まい、其返報には夫婦の者をハツ裂にもなされ、サちつとも惜まぬ、惜まぬ命は二つ有共一つもけふの影に立ぬ、ほいなさ無念さ悲しさを、推量有とはら、涙、始終の様子附く信夫、涙を押へ傍により、十年に餘る宮仕へも、たつた一日御奉公申ても、お主様に違ひはない、其御難儀が何と聞て居られふぞ不束な此身でも、お役にさへ立ならば願ふてもない、お身代り、サア御用に立て下さんせと、聞もあへず、走り寄、娘をしつかと抱しめ、アコレつか、ともの言やんなハイ、イヤ申、此子はアノ私一人て出来た子ではござりませぬ、顔も

知らず名もしらぬ爺親が御座ります  
 其親を尋ね手渡しする迄はア、コリ  
 ヤ／＼いかにうろたへたればと  
 て母親斗りで出来る子が三千世界に  
 有ふと思ふか、エ、其上顔もしらず  
 名もしらぬ爺親を尋手渡しするとは  
 何をしるしに尋るぞ、偽り者、表裏  
 者めコリヤヤイ子心にさへ主従の道  
 を辨ふるに、見限り果たる女め、娘  
 を連れて早歸れ、サ花の井こちへと立  
 上る、なふコレ待て下さりませ、偽  
 り者と言れては親故此子の道立ず、  
 顔もしらず、名もしらぬ、夫を尋る  
 するしは、是と上の一重を押服ば、  
 右はかはらぬ詰袖に、左ばかりは振  
 袖の、濃紅の染模様、橘ならぬ袖  
 の香の昔床しく忍ばしく、娘が開前  
 恥かしき昔咄し、私元は播州姫路の

近在福井村、本陣の何某こそ、私が  
 父母、十八年以前、頃は夜も長月の  
 廿六夜の月待の夜、數多泊りの其中  
 に二八餘りの稚兒すがた、こつちに  
 思へば其人もすれつもつれつ相生の  
 松と松との若みどり、露の契りが縁  
 のはし、ヲ、恥かしやついで、暗りの  
 轉び寝につらや人の足音に戀人も驚  
 きて、起行く袂ひかゆるを、振切急  
 ぎ行く拍子、ちぎれて我手に残りし  
 は此振袖かり、寝の情は浅けれども  
 妹脊の縁や深かりけん、其月より身  
 も重く、懐胎し、後にて何と説方も  
 産落せしは此信夫、縁あればこそ子  
 迄もふけしもの、此振袖をしるべに  
 て、再び尋逢んと國を、／＼出て十  
 七年、水子をかへさま／＼とさま  
 よひめぐりしうき艱難、今に尋逢ね

其女の念力、是こそは娘よ父よと名  
 乗合するそれ迄は、身にもかへぬ大  
 事の娘、お役に立ぬは右の譯、卑怯  
 末練でない申し譯、娘にはどふぞお  
 隙を下さりませコレ信夫サ、立ちや  
 へ、コレハシタリ立ちやいのと  
 言へば立兼見捨かね、親子心の隔て  
 の一重、始終開入武藏坊、信夫が脊  
 骨障子越ぐつとさいで一決り、うん  
 ともだゆる苦しみに、こは／＼いか  
 にこはいかにと、傍で見ると三人  
 はあきれ果たるばかりなり、母は泣  
 やり氣は狂亂、扱は夫婦と言ひ合せ  
 大事の／＼娘をむごたらしい、サア  
 元の様にしてかへしやと、武藏にし  
 つかとすがり付、泣より外の事ぞな  
 き、眞中に辨度どつかと座し、コリ  
 ヤ聲びくにほざきおらふ、刻限來れ

ばぜひなくも、障子越の一抉り、是  
には深き仔細有る事と、こぼへずと  
是見よと、押肌脱ばこはいかに、下  
着の衣の紅ひに、大振袖の伊達模様  
ヤア其振袖はヲ、此片袖はそつちに  
有筈日外播州福井村にて人目を忍び  
暫しの假寝扱は汝で有たよな、エ、  
そんならお前が其時のアノ幼稚様  
かいなヲ、書寫山の鬼若丸だ、エ、  
すりや眞實の我子じやないかいのふ  
ヲ、サ、始てつら見る假寝の爺親、  
殺したはお主の身代りだは、ハアは  
つとばかりに、母親はコレ娘あれ聞  
やつたかいの、そなたの爺御とい  
ふはアノ辨慶様じやといのふ、サ  
、ちやつと御對面申上やいと抱き  
起せば起されて、母様何やらおつし  
やるそふなが耳が聞へぬもふ目が見

へぬわいの、私しや今爰で殺されて  
お主様の身代りに立と思へば嬉しい  
が親一人子一人の私に放れ、たより  
ないお前のお身が案じられ、それば  
かりが黄泉のさはり、イヤ申し御夫  
婦様、便りのないか、様、どふぞお  
頼み申ます、又か、様も今からはお  
二人様を大切に、お身を大事に長生  
して、と、様に廻り合、仲よふ暮し  
て下さんせ、又折々は私も、不便と  
思ひ朝夕の御回向頼み上ます。そ  
ればかりといふ聲も次第々々にせ  
ぐり來て、早玉の緒も切果て、此世  
の縁は切にけり、ハア悲しやと氣も  
亂れ、母は死がいを抱き上げ、コレ  
信夫今一度ものをいふてたもいの、  
是が、一世的の別れかいのふ、い  
ふて返らぬ事ながら春丈伸るにした

がいて只と、様に逢たいとしたふも  
我子私も又どうぞ逢たい、と尋ね  
さまよひ國々を廻り、て今爰で逢  
ぬがまして有たもの、死る今はの際  
迄も誠の父としらずして、母をかば  
ひし心根がいぢらしいやら悲しいや  
ら此胸をさく様な、同じ殺す道なら  
ば、互に父と娘かと名乗合した上な  
らば、此思ひはエ、マあるまいもの、  
浮世に心残るのである、是ばかりに引  
されて、三途の川と死出の山、迷ふ  
てたもんな迷はぬやう道は一筋はる  
く、ぞや、法の光りやともし火のか  
げを力にとぼくと、歩む姿を目の  
さきに、今見る様におもはれて、可  
愛はいのとばかりにて、空しき死骸  
を抱しめ、聲も惜まず泣居たる、辨  
慶涙掛かくし、汝が咄し聞くと等し

く、扱は我子と飛立ばかり、生顔も見かりしが、ア、イヤ〜なま中に見つけせては、未練な心も起らんかと、腕に任せて抉りしもの、ひとたまりもこたへふか、我生れてより此年まで後にも先にもコレ御夫婦、たつた一度でござつた、ア、ほて轉合な事をして、生れし我子と聞よりも憎からふか可愛かるまいか、其様に泣きを見て、太郎夫婦が居やらずばと泣きより泣ぬくるしみは、コリヤ鳴蟬よりも中々に鳴ぬ蟬の身を焦す、小唄も我身に知れたり、是に付ても親の恩、今、取わけて、思ひする、唐土の樊噲が母の小袖を母衣と名づけ戦場まで持たりといふ、それを覺ぶにあらねども、此下着は母の手づからくだされしを、汝に片そでをとら

れたれども、なき母に添心地して縫も直さず、振袖の此儘四國九州一の谷へも押寄々々危き難を運れしも、是ぞ誠に親の影、年月重ね肌身放さず持し故、名もしらず顔もしらぬ親と子の印となつて十七年目に廻り合主君の絶体絶命の大事のお役に立る事、偏に亡母の賜はりし此小袖に手を通し、親子一所に引合せ賜ふとはハ、ハ、ハ、ハ、廣大無邊の親の慈悲ヲ、能死だ出かしたなとは、言ひつゝも息ある中、我こそ尋る爺御ぞと、こんな頬でも見せたらば、嘸罨しがらふもの、是ばかりが残念と臉で拂ふ包泣、侍従夫婦が貰ひ泣、四人が涙、八つの袖八つの、時計に打交せて生れた時の産聲より外には泣かぬ辨慶が三十餘年のため涙一度に亂す



大和御茶  
茶室  
電話新町六二番

ぞ果しなき、武藏心を取直し、なむ  
 三寶早八つ時、サア太郎殿卿の君の  
 御首、討て渡されよヲ、心得たりと  
 信夫が死骸引よせて、あへなく首を  
 討落し、返す刀を我弓手の小脇にぐ  
 つと突込たり、人々是はと立懸をヤ  
 騒ぐまい武藏殿、我切腹御合點だ參  
 らぬか、郷の君の乳人とは、鎌倉殿  
 もしろし召れたる、侍従太郎が此首  
 を添て渡さば天地を見ぬく梶原も、  
 造り花とはよも言ふまい、サア武藏  
 殿ときうつる、はや首討てたべヲ、  
 合點と拔はなし、ひらりと見へし刀  
 の影、首は前にぞ落にける、立直つ  
 て大音上、ヤア門前にひかへし者ど  
 も慥に聞け、郷の君の御首侍従太郎  
 二つの、首を只今受取立歸るとそれ  
 としらすは胸有て館へひとくばかり

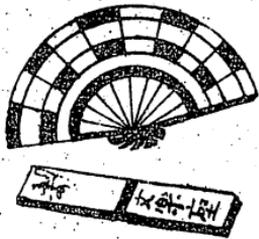
なり、すぐに袂を押切く二つの首  
 を包に餘る目にもるゝ涙よ歎き果し  
 なきさらばくと首を左右にかき抱  
 き立上れば、是なふしげしと取付て  
 我は未來の約束せん、我は親子の一  
 世の限り俱に名残に今一度亡顔見せ  
 てたべなふと、泣どしたへどこがる  
 れど心強も振捨て見せぬもつらし  
 見ぬもうし、かへらぬ道にあこがる  
 夫の別れ子の別れ二つなげきを一  
 すじに見捨て御所へぞ立歸る。



各種扇問屋

戸田商店

大阪市南區道頓堀  
 電話南〇六九二番





心

心中天網島

河庄の段

紙屋内の段

粉屋孫右衛門  
江戸屋 太兵衛

豊竹呂太夫  
豊竹陸路太夫

五貫屋善六

竹本隅榮太夫  
竹本津の子太夫

紀の國屋小春

竹本伊達太夫  
豊竹駒若太夫

河庄亭主

竹本常子太夫  
竹本土佐子太夫

見物人

竹本相若太夫  
竹本生太夫

紙屋治兵衛

鶴澤友次郎

人形

紙屋治兵衛  
紀の國屋小春  
粉屋孫右衛門  
河庄亭主  
江戸屋 太兵衛  
五貫屋善六  
見物人

吉田榮三  
桐竹紋十郎  
吉田玉藏  
吉田兵次  
吉田幸次  
吉田玉幸  
大田玉市  
大田玉幸

この淨瑠璃は文豪近松門左衛門が一代の傑作と謳はるゝ名作で享保五年十月十五日の明け方大阪綱島大長寺で情死をした小春治兵衛の件をすくさま脚色して十二月六日初日で竹本座にかけたもので以來心中物の白眉とされてゐます。天満の紙屋治兵衛は妻子ある身ながら會根崎の紀の國屋小春と深く契を結ぶ。兄粉屋孫右衛門は是を憂へて侍妾に身を扮し河庄に到り小春に遭ひ二人の仲を割かさうとし折から一卜目でもと小春に會ひに來た治兵衛にも意見を加へ

ます。小春は女房のおさんの依頼の狀によつて義理に挟まれ心にない愛想づかしをいひます。治兵衛の戀敵太兵衛が小春を身請けするとの噂を聞いておさんは衣類を質入してまで所要の金を融通し、治兵衛に顔を立てさせんとす。舅五左衛門はこの体を見ておさんを連れ歸ります。治兵衛は小春と綱島大長寺へ往き情死を遂げるといふ義理と愛に涙を絞る世話物であります

(床本) 河庄の段 (切)

天満に年經る。千早振。神にはあらぬ紙神と世のわに口に乘斗り、小春に深くあふぬさのくさり合たる御注連繩、今は結ぶの神無月堰かれ逢れぬ身と成果あわれ逢瀬の首尾あらば

夫を二人が最後日と名残りの文の云  
かわし毎夜の死かくご、魂抜  
てとぼくうか、身を焦す、煮賣  
屋で小春が沙汰。侍客で河庄方と  
耳に入よりサア今宵と。覗く格子の  
奥の間に。客は頭巾の頭。動く  
斗に聲聞へず。可愛や小春が燈火に  
背けた顔の、瘦た事わいの、心の  
中は皆おれが事、爰に居ると吹込で  
連て飛なら梅田か北野エ、知らせた  
い呼たいと心で招く氣は先へ身は空  
蟬の抜殻の格子に抱付あせり泣、奥  
には客が大欠び、思ひのある女郎衆  
のお伽でイヤモとんと氣がめみる。  
門も静な端の間へ出て行燈でも見て  
氣を晴さふサアござれと連立出れば  
なむ三寶見付られじと身を忍び隠れ  
て聞共内には知らず。なふ小春殿背

からのそびり詞の端に氣をつくれば  
花車が咄しの紙治とやらと心中する  
心と見たヤサ違ふまじ死神の付た耳  
へは意見も道理も入まじとは思へど  
も去とは愚痴のいたり先の男の無分  
別は恨まず一家一門そなたを恨み憎  
しみ萬人に死顔さらす。身のはぢ親  
はないかも知ねども若しあらば不孝  
の罰、佛はおろか地獄へもコレマお  
たゝかに二人連では落られぬヤ、  
ア、勞はし共笑止共一眼ながら武士  
の役見殺しに成がたしコレ定めて金  
づく、五兩十兩は用にたても助たじ  
何と死る氣に違ひはあるまいかの神  
八幡侍冥利コレ他言せまじ小春心  
底残さず打明きやれ、サ、どふじや  
く、と騒げば手を合せエ、忝いあ  
りがたい馴染よしみもない私。御誓

言での情のお詞涙がこぼれて嬉しう  
ござんす。ほんに色外にあらわると  
お前様の推量の通り紙治様と死る約  
束親方にせかれて逢瀬もたへ差合あ  
つていま急に請出す事も叶す南の元  
の親方と爰とにまだ五年ある年の内  
人手に取られては私は元より主は猶  
一分立ずいつそ死でくれぬかエ、死  
ましよと引に引れぬ義理詰に、ふつ  
と言替し首尾を見合せ相圖を定め抜  
て出よふ抜で出よといつ何時を最期  
共其日送りのあへない命私一人を  
頼みの母様死だ後では袖乞非人の飢  
死もなされふかと是のみ悲しき私連  
も命は一つ水くさい女と思し召のも  
恥ししながら其恥を捨て、も死共ない  
が第一死ずに事の濟様に。どふぞお  
前を頼みますと、語れば黙き思案顔

外には、つと聞て、驚き思ひがけなき男氣、木から落たる如くにて氣もせき狂ひエ、扱は皆姫か二年と云物化された根性くさりしアノどう狐踏込で一討か。顔恥か、せて腹いよかと。齒ぎりぎり、口惜涙内にも小春が託ち泣コレ申モ卑怯な頼み事ながら。お侍様のお情に今年中來春二三月の頃迄も私に逢て下さんして彼男のくる度毎に邪魔に成て期を延し期を延せば、自手を切て先も殺さず、私も命を助る道理何の因果で死ぬ契約した事ぞと思へば悔しうござんすと。口と心は裏表絞る袂は雨露の膝にもたれて泣き居たる。ア、開扇たそなたの願ひコレ難もくる人や見ると格子の障子ばたくと立聞治兵衛が氣も狂亂エ、流石賣物やす者め

胴性骨見違へし、エ、口惜や切らかつかかどう障子に移る二人の横顔。エ、くらわせた。はりたい何ぬかすやら顔き合。拜む囁くほへるさま胸を押へさすつてもこらゑられぬ勘忍ならぬと心もせきに。せきの孫六一尺七寸抜放し格子さきより小春が脇腹爰ぞと見えわめぐつと突に。座は遠く是はと斗怪我せな透さず待飛かゝり兩手をつかんでぐつと引入刀の下緒手ばしかく格子の柱にがんどがらみにくゝる内立歸る此の家の夫婦ヤア是はとばかり驚け。苦しうない、障子ごしに拔身を突込あばし者腕を格子に括り置たれば氣づかいな事はない。そなた衆は小春を連れて奥へ行きやれ身共はアノ狼狽者何故斯様の狼狽をいたすぞ詮議

するサア、早く奥へ行きやれ、イエ、お前斗爰に置ましては浮雲ござりますイヤサコリヤ人立あれば所の騒ぎ大勢が立口口論に及べば武士の立ぬ様に成るまい物でもない。と云ふ遊人故身も忍びの遊興、よい、身共斗り爰に居て氣づかひならいつしよに奥へいかふ小春、おじやいて、寝よふアイあいとは云ど見知りある脇指のつかれぬ胸にはつと貫き治兵衛様何が何とイヤサア慈悲と云事がなければ人は難儀をするげな餘まり酒を過して色里にはあるならい。沙汰なしに。いなしてやらんしたらナア。河庄さん。わしよさそやうに思ひます。いつそ此繩といて。アコリヤ、其繩とくな、括り付しは仔細あり身次第にして皆奥へ

夫れでもお前ハテ構はずと小春おじやいのと、打連立て奥の間の影は見ゆれど括られて格子手枷にもがけばしまり身は煩腦に纏がる、犬に劣つた生恥を覺悟極みし血の涙絞り泣こそ。ふびんなれ、ぞめき戻りの。身すがら太兵衛善六件ひたち歸りヤイコリヤヤイ、こうし親の覗いてけつかるはどいつじやい、エ、いやみやつじやな、コリヤ頬かぶり取、エ、ほうかぶり取りやがれヤ治兵衛がわれに逢たふて、宵から一遍尋たはやい。サア甘兩の金戻せ。ム、甘兩の金とは。ヤアとぼけなやい。確な證據と懐の紙入より證文を取出し。コリヤ是を見い。エ、一つ金子甘兩成右は今日入用に付難儀いたし候所御取替下され候段御慈悲の程忘

れ申さず、あり難く存奉り候何時成共此手形を以て。きつと返済申べく候後はお定りじや。江戸屋太兵衛殿紙屋治兵衛判けりやわれが直筆じや、ぞよ。是でも覺へがないかさア夫は此間石町の御出家に。ヤアどこへぬけ、と。そふわ拔させぬ。コリヤ證文が物云ふはやい。何じや逢たい。逢たいとは誰に逢たい、ア、コレ、太兵衛さん、ぐづいふにや及ばぬわいのヲ、そふじや、エ、うしやがれアイタ、ハ、ハ、善六、ちよつと見い、治兵衛がいたいとぬかすはづじやコ、これ見いしぱり付けられてけつかるはいエ、どこにほんにけつたいなアこりやまどふしたんじやるうなエ、聞えた扱は盗びるいだな

大騙め、がん盗め。息ずりめと。蹴飛し蹴ちらし、はり廻しコリヤ紙屋治兵衛が盗して縛られたと。呼はりわめけば往來ふ人邊近所も駈集る。内より侍飛出善六を突飛し太兵衛が腕捻上ればアイタ、、、こりや何とすりや、此治兵衛には仔細あつて某が縛置く己らが土足にかけ盗賊との狼藉已最前是へ參る砌無禮を働く泥坊めサア治兵衛が何盗んだ騙とは何を騙つた。サそれぬかせア、コレ、お侍證據のない事云はぶかい。コレ此證文が確な證據コレ見やれいの、何んとはかりやしたか夫れほど恩を見せた甘兩忝ないと禮はぬかさず。イヤ坊主じやのイヤ御出家のと、間に合をぬかす故騙と云ふたが誤かちつとそふもあるま

い。ドレ其一札と取にかゝるを孫右衛門透さず投出す甘雨太兵衛が顔に打付けるアイタ、ハ、治兵衛が借た甘雨エ、ハイ是は御きんとうさまにそんならおいたゞき申ましょふかい。エ、コリヤ後で小言を云ぬやう一兩、改て受取おろう。ハイヘイ、申分はないか、イヤモ金請取ば云分は。ござりませぬ云分なくばコリヤこうと太兵衛がゑり髪引摺む是はと立寄る善六を沈んで投付又起する太兵衛をば蹴飛ばし、投ちらせばほう、起て祝廻し、ヤイおのいらよふ、見物して叩かせたな一々に面見覺へた。返報する覺へておれとへらず口にて、逃出す立寄人々どつと笑ひ。ヤアどつかれてさへアノおとがい橋から投て水くらはせ

やるな、と追かけ行、人立透ば侍立寄て括りめとき、頭巾を取捨コリヤ此面を見よヤ兄者人と逃んとすれば孫右衛門引とゞめヤ動きおるまいうぬサア云事がある。うせうと引立内に引居れば兄者人、面目なやと。どぶど座し。壘ひれふし泣居たる扱は兄御様かいのと。走出る小春が胸ぐら取て引すゑヤ畜生め狐め太兵衛より先うぬをと、足を上れば孫右衛門ヤイ、其たわけから事がおこるわい、コリヤ人をたらず遊女の習ひ儂が目には今見へたか此孫右衛門はナ、たつた今一現にて逢た女郎の心底を見ぬて居るわい小春を蹴る脛で狼狽た其儂が根性をなせ蹴ぬエ、是非もなや弟とは云ながら三十におつかより勘太郎お末

と云六つと四つの子の親六間口の家を持身体潰る、辨へなく兄の意見を詰る事かい舅は伯母舞、姑は伯母者人親同然女房おさんは我爲には従弟結び合、重の縁者親子中一家一門參會にも儂が會根崎通ひの悔より外餘の事は何にもないはい。いとしいは伯母者人連合五左衛門殿は。にべもない昔人かゝの甥子に倒され娘を捨てたおさんを取かへし天満中に恥かゝせんとのお腹立伯母者人の氣抜ひ敵になり味方になり病になる程心を苦しめコリヤ儂が恥を包まるゝ恩知ずこのばちたつた一つでも行先きのが立斯ては家も立まじ小春が心底見とどけ其上の一思案伯母の心も休めたく此亭主に工面し儂が病の根元見届くる女房子にも見かへしは

尤もち、心中しんちゆうよしの女郎ぢやうらうア、お手柄てがらく結構けつこうな弟あにを主人しゆじんにも、知れし粉屋こなの孫右衛門まごゑもん祭りの綱なわり乗のりか氣違きちがひかついに差さぬ大小たうしやうばつ込藏こんざう屋敷やしきの役人やくじんと歌舞かぶき伎役ぎやく者のまねをして馬鹿ばかを盡つくした此刀このたなおりや、捨所すてどころがないわいやい。小腹こはらが立たつやら、胸むねが痛いたいと齒はざしあまりの事ことでエ、胸むねが痛いたいと齒はざしみし泣顔なみけ隠かくす緞面じゆんめんに小春こはるは始終しじゆうむせ返かへり我身わがみの上うへは多おほもいはず兄あにの意見いけんと母親ははおとの心こころづかいを思おもひやり、みなお道理だうりと斗はかりにて詞ことばも涙なみだにくれにけり治兵衛ちへいゑ涙なみだを押拭おしぬぐひア、誤あやまつたく誤あやまりました。兄あに三人さんにん先まづよりアノ古狸ふるねこに見み入れられ親おや子こ一門いっもん妻子さいし迄まででになし身体しんたの手て纏まとれも、小春こはると云いふ家尻けしり切きにたらされア、後悔ごうかい千萬せんまんモ、ふつゝり心こころ残のこらねば足あしむきもするまじ

ヤイ狸たぬきめ狐きつねめ家尻けしり切きめ貧乏びんぼう神かみの親玉おんたまめ思おもひ切きたと云い證據じやうこは見みよと肌はだにかけたる守まもり二ふたつ月つき嶺みねに一枚まいつゞ取とりかわしたる起證おきしやう合あせて廿九にじゅうきゅう枚まい戻もどせば戀こひも情なさけもないコリヤ請取うけととはたと打うちつつけ申まをし者もの人ひとあいつが方かたのわれらが起證おきしやう數かず改あらわて請取うけとてお前まへの方かたで火ひにくべて下さくだりませ、ヤア何なんといふスリヤふつゝりと思切おも切きたかハイ微塵みじんも心こころは残のこらぬなム。ハイ。ヲ、出でかした男おとこじや人中にんちゆうで面恥つらばしかゝせた孫右衛門まごゑもん血ちを分わけた兄あにじやと思おもへばこそ、よふ思おもひ切きた嬉しいぞよ。イヤナニ小春こはる殿どのこちの治兵衛ちへいゑは男おとこでござる。さつばりと思おもひ切きました今迄いままでは小澤山こざくさんによふ書かてやつて下さくだつた。此起證おきしやう返かへします治兵衛ちへいゑが方かたから何なんやら書かてやつた物ものがあるげな夫それをこつちへ返かへして

下くだされハテ今いまに成なる何なんのうぢく。サ早はやふ是これかくと懐ふへ手てを指込さしこんで守まもり袋ぶくろ引ひ出す一ひと通とほハテおしうもない此紙このかみ屑くず残のこらずお返かへしなされと云いつゝ讀文どくぶん見て喫驚おびナニ小春こはる殿どの參まゐる紙屋かみや内うちア、コレソリや見みせられぬ大事だいじの文ぶんと。取付手とりつけてをとり孫右衛門まごゑもんム、スリヤこな様さま此狀このさまの客きやくへ義理ぎり立て、コレ申まをし者もの人ひと何所なんどころの客きやくからきた狀さまじやちよつと見みせてハテ扱さどこの客きやくから狀さまが來きふと思おもひ切きた女郎ぢやうらうの事こと、わがみの構かまふ事ことはないサ、そつちへよつて居ゐや。コレ小春こはる殿どの最前さいぜんは侍ざむらい冥利めいりは、今いまは粉屋こなの孫右衛門まごゑもん商あひ冥利めいり女房子にようぼうし限かぎつて咄はなししはせぬア、勤つとめの中なかにも夫程それほど迄までイヤサ眞實まことのないはへ、女郎ぢやうらうの常つねじや、最前さいぜんの水みづくさい詞ことばはこう云いふ狀さまが來きであるから是これじや物もの。道理だうりじや

夫に心中仕て死ふとはまいかい  
 おほうではあるはい、思ひ廻せば廻  
 す程おかしいやら不便なやら餘りの  
 事で涙がこぼれるハ、ハ、ハ、と笑ひ  
 に紛らす眞實は口に云れぬ心の禮孫  
 右衛門様必ず其文外へ見せて下さり  
 ますな起證と共に火に入れるコレ誓言  
 に違ひはないア、忝ない。それで私  
 が立ちますと又伏沈めばアハ、ハ、ハ、  
 、何の情が立の立ぬとは人かまし、  
 もふこう成からわ片時も面が見とも  
 ないサア兄者人歸りましょ、いか  
 様最前からの様子腹が立ふサアそん  
 なら同道しませうサア先へ行きや。  
 ハイ。行きやれ、エ、行やいのと  
 云にしほ、立出る。兄者人どうも  
 愛がたまりませぬ今生のおもひ出に

たつた一つあいつが面をと走りよる  
 をア、コリヤ、立さはいでどふす  
 のじやハイどふも仕や致しません  
 そんならどふもせんならこゝからい  
 うたらよいわいハイ何んの口でいう  
 斗りでございますそんならゑいハイ  
 エ、ナエ、何んにも言はいでもよい  
 事ヤイ赤狸め情故に面恥かき、足か  
 け三年と云物戀し。ゆかし。いとし  
 可愛も。けふと云けふ愛想が盡たは  
 いたつた。此足一本の暇乞と額際  
 つたと蹴てわつと涙出す男氣を思ひ  
 やる程堪兼て。もふこりやどふも。  
 いつそ心を打明てコレ、蹴れふが  
 た、かれふが、そこをじつとしんぼ  
 うせずば此狀の客へ義理が立つまい  
 ぐがの小春殿と孫右衛門に制せら

れハア、はつと斗に泣別れ歸る姿も  
 いた、しく、後を見送り聲を上な  
 げく小春もむごらしきぶ心中か心中  
 か誠の心は女房の其一筆のおく深く  
 たが文も見ぬ戀の道別れてこそは立  
 歸る。  
 (床本) 紙屋内の段 (中)  
 福徳に天満神の名を直に、天神橋と  
 行通ふ、所も神の御前町いとなむ業  
 も紙店に、紙屋治兵衛と名を付て千  
 早振程買に來る、神は正直商賣は、  
 所がらなりしにせなり日脚も傾く  
 がみ、辻横町から身すがら太兵衛、  
 ア、治兵衛殿内にか、イヤ内にぞふ  
 な、サア金受取らふ、こんな腰金は  
 入らぬ。正眞の金返して貰はふサ、

紙屋内の段

中 竹本源路太夫  
鶴澤寛市  
切 竹本土佐太夫  
野澤吉兵衛

人形

紙屋 治兵衛 吉田榮三  
女房 おさん 吉田文五郎  
おさんの母 吉田小兵吉  
粉屋 孫右衛門 吉田玉藏  
丁稚 三五郎 吉田榮三郎  
舅 五左衛門 吉田玉次郎  
紀の國屋 小春 桐竹紋十郎  
江戸屋 太兵衛 吉田玉幸  
五貫屋 善六 吉田玉市  
勘 太郎 桐竹紋昇  
お 末 吉田文枝

今展せ〜と上り口に大あぐら、ヤコレ、太兵衛そりや何云ふのじや、全体宛名の違ふた金、覚えなければど其場の張合、お侍の世話で二十兩は濟したじやないかが、其時貴様改めて、サイノ、二十兩に違ひはないがマよふ似た正眞には見ゆれど、一兩も遣はれぬ、コ、是を見や、ヤモとんとの胴脈けき問屋の仕切にやつたら、贖金の尻が破て、此太兵衛迄が疑はれるわい、治兵衛、いぞや〜エ紀伊國屋の小春と、くさりついた二人が仲、揚代にせがまれ、ソレ貴様ぎちかは〜して居たおれが性としてイヤモ氣の毒でならぬじやによつて、取替てやつた貳拾兩、ハ、アこりや何か侍めと云ひ合せ、此太兵衛をやつたのぢやな、イヤサ

やつたのじやなア〜マめんよふ合點の行ぬざぶじやと思ふたといつてもこいつも悪いやつらじやなサア其侍に逢ふ、治兵衛かたりめを爰へ出せと、そこらあたりへ當り眼、コレ太兵衛殿お侍には及ばぬ、一体この貳拾兩は清水の浮無瀬で石町の隠居坊主に思ひも寄らず借つた金名宛を白紙でやつたが誤り、が太兵衛といふ名宛ではサア借らぬ物がなせ返した、イ、サイノ、コレ、贖金で返せといふ、相對はせんぞよ、こんな恐ろしい言事せずと、五器提ておれが門へ立てやい、へ、ン江戸屋の太兵衛は大金持ちやわい、臺所の餘り物犬の五器の分でも四五人は樂に喰へるわい、エ、こんな事すなやいと、足で蹴返す贖金の、包も切れ

る腹立涙、ム、そうぢや石町の借座敷隠居坊主といふたも曲者、引ずつて来て面張れとかけ出すを、女房引留めア、コレ、治兵衛様も是程に手を替て仕込みに仕込んだ悪たくみ石町の借座敷に、今迄何のうか〜居やう、コレ氣をしづめて下さんせと、奥より出づる孫右衛門の顔を見るより、コラ治兵衛此返報きつとするおぼえてけつかれと、へらず口後をも見づして立ち歸へる、道引違へいさせと、おさんが母は内に入りコレ孫右衛門、こちの親父五左衛門殿、年寄の氣はいらく〜早ふ安否を聞きたいと、昔堅氣でやかましい、ム、御尤で御座ります、イヤモ一治兵衛が事は御安堵なされ、小春が事も何も斯も皆埒があいて仕舞真人

間になりましたわいのと聞て母親打ほ〜笑ヲ、それは嬉し〜忝いが逆も心落付る爲親父殿〜面晴にどうぞ誓紙が書いて欲しいわいの、イヤモ何が扱何ん時でも書きませふと、さら〜と書認め、母が前へ差し出せば手に取つて讀下し、ム、誓紙はたしかに請取ました、サア孫右衛門連立つて行ませふム、ホンニついでに孫も一緒に連れて遊ぬ、早う歸つて親父殿に安堵させたい、是も十夜の如來のおかげ、詞是からなりとお禮の念佛、エ、南無阿彌陀佛〜も口ごもる心ぞ。

(床本) 紙屋内の段 (切)

M 直に佛なり。門送りさへそこに治兵衛は傍にあり合す定木を

枕轉寢のあたる炬燵の小はる時まだ會根崎を忘れずかと退るふとんの内さへも涙にしめる其風情おさんは呆れつく〜と顔打守り打守り、エ、餘りじやぞ〜治兵衛様、夫程名残が惜なら、誓紙書ぬがよござんす、なせにお前は其の様に私が憎ぶござんすへ、ア、コレ〜、ソリヤまあ何を云やるぞいの、子までなした二人が中に、イエ〜憎いそうなく憎ましやんすが嘘かいなア。おと〜しの十月中の亥の子に炬燵あけた祝儀逆ソレ處で枕ならべて此方は女房の懐には、鬼が住か蛇が住か夫程心残りなら泣しやんせ〜其涙が蜷川へ流れたら小春が汲で呑みやらふぞ。餘りむごい治兵衛様何ぼお前にどの様なせつない義理がある逆も二人の

子供お前何共ないかいなと心の限り  
くどき立恨み歎くぞ誠なるヲ、尤  
じや誤つた悲しい涙は目より出無念  
な涙は耳から成共出る成らば云ずと  
心見すべきに同じ目よりこぼるゝ涙  
足かけ三年が其間露程もりん氣せぬ  
そなたに云も恥しながら此間も會根  
崎で残らず開ぬた小春めがぶ心中、  
今と云今夢も覺め思ひ切てはゐるけ  
れどアノ太兵衛めが急に身請をする  
との噂退て十日も立ぬ申請出さるゝ  
義理知らずの畜生めが事は心残らね  
ど間屋中の付合にも金の工面に盡し  
故小春を退たの何んのとてえしれぬ  
やつらが口の端にかゝるが無念な口  
惜いとサ思はず涙をこぼしたはいの  
ふエ、そんなら小春様はお前に、あ  
いそ盡し云てアノ太兵衛が所へ行く

筈かへハテきよとくしい其聲はい  
のイ、エイナアそんなら小春様は生  
て居る氣じやない死なしやんすはい  
な、ハテ扱何ば發明でも追は町の  
女房じやアノふ心中者が何の死ふぞ  
イエ、くそふじやござんせぬ小春様  
にぶ心中は芥子程もないけれど日外  
よりお前のそぶり何を云てもうか  
くとも悲しい目を見よふかと案  
じ過して小春様へいとしいと思わん  
す治兵衛殿の爲じや程に思ひ切て下  
さんせと書くどいてやつた文引かれ  
ぬ義理と合點して親にもかへぬ戀な  
れど思ひ切るとの嬉しい返事は程眞  
實な心で何の太兵衛の所へ行かしや  
んしよ請出された其儘に死る覺悟に  
違はない小春様を殺しては、此さん  
が義理立すどうぞ命が助けたい思案

して下さんせひよんな事どうせうと  
始めて明す女房の誠ムウそんならア  
ノぶ心中と見せたのはそなたの頼か  
アイナアホイそりややつぱりおれを  
大切からハアそうとは知らず今迄も  
義理知らずの畜生のと恨だ心が恥し  
いアコレ夫云手間でこな様往てどふ  
ぞ殺さぬ様にしてしんせて下さんせ  
いな、ハテ小春が命助かるは百五  
十兩せめて半金成り共手附に渡し取  
留るより外はないが何を云ても金の  
工面に盡きた此身ノウ仰山なそれで  
濟なら安い事と立てたんすの小引出  
し明て取出すないませの紐付帛紗お  
し聞き差出す一包、治兵衛取上びつ  
くりしコリヤコレ小判五十兩どふし  
てそなたがサア此の金の出所も後で  
語れば知れる事此晦日に岩國の仕切

金にさいかくはしたれども、それは兄様と。だんごうして商の尾は見せぬはいな小春様の方は急な事ソレ其小判五十兩と残りは。わしがと。かい立つて、あけて取出す染小袖兼て、斯とは白茶裏黒羽二重も色かへぬ淺紫の糸目結びつた鹿の子おしげなふ子供のものもかい集め内端に見ても甘雨よもや貸さぬと云ふ事はないものまでも、ある顔に夫の恥と我義理を一つに包む風呂敷の内に情ぞ籠ける私しや子供は何着めても兎角男は世間が大事身請して。あの太兵衛に一ぶん立て下さんせと云へどいらへも涙聲ヲ、過分ぞや忝い手附渡して取留請出して困て置か内へ入るにしてからがア、そなたは何とと云さして打しほるればア、何のい

なア心案じて下さんすなへハテも子供の乳母か飯焚か面倒ながら眞實の妹くく持つたと思ふてと。云ふ胸まで突きかける涙吞込くで夫に立る貞節は傍で見える目もいぢらしきエ、何にも云ぬコレ女房共親のばち天の罰佛神の罰は、當らず共マ女房の罰が恐ろしい、赦してたもと斗にて、伏拜む手を、ア、コレ旦那どの何しやしんす勿体ない勿体ない事して下さんすないなモく手足の爪を放しても皆夫への爲じやもの後の間ではせんない事サアく早ふと三五郎呼出し渡す風呂敷懐へ金押入れて立出る治兵衛殿お宿かと門口還る五左衛門ヲ、是はしたり舅殿マアよふ御出も夫婦はうぢんく三五郎が脊負たる風呂敷見付てコリヤあほう

め其包みどこへ持つて行く又質屋へうせるのかこつちへおこせと引たられびつくり拍子拔参りの宵に知れたる心地にて一間の内へ入舅は猶も興に乗つて、大方斯であらふと思たはい着類着そげを質にまげてお山狂ひに仕上るのじやなお山狂ひに、コリヤヤイ女郎の誠とな鬼瓦の笑ひ顔とはない物じやぞよサア手短におさんに暇やりや女の子は母へ附が世間の大法ジャガおすえはさつきに、祖母が連れて戻り此誓紙をひけらかしておれに渡した。ア、えらい様でもさすがは女こんなで行のじやないぞよサア誓紙の替りに去狀書。あんだらくさいと引裂く治兵衛が顔へ打付てお上にどうさり大白なり。おさんは開兼コレとく様ソリヤお前開へ

ませぬはいなく、こちの内の身体の  
おとろへたのも皆お前からおこつた  
事ないもせぬ銀山にかゝつたと云て  
三十兩借五十兩借あげくには其銀山  
がつぶれたとやら元も子もないよう  
にして仕廻しやんしたぞへ男氣な治  
兵衛殿の事なり云出せばこつちも  
恥と證文も残らず戻し濟さしやんし  
た其時にはコレ此怖い顔に涙をこぼ  
して悦ばしやんした事を、おまへよ  
もや忘れはさしやんすまいがのお前  
又主の悪所通ひも元の起りはこなさ  
んから起つた事れつきと仕分でも費ふ  
た身体何して金が減たぞと本家の不  
審が立つた時ハイ勇殿に取れました  
と鼻毛らしう云れもせずと口へ出し  
て云こそさつしやらね志を推量し  
て初手の間の茶屋通ひは世間へ聞へ

にもさつしやる事かとぼんにやれ  
く行しやる度く。わしや後か  
ら拜んで居た拜んで計りゐたわいな  
く其大恩を打忘れあほうじやのイ  
ヤたわけのと假初にも勿体ないこら  
へて下されこちの人。と、様遊で下  
さんせと。なだめつ阿つ、兩方へ我  
身一つの。せつなきつらさ思ひやら  
れて道理なる思ひは同じ。うき思ひ  
身の云譯に紀の國屋小春はこゝへ來  
かゝりて様子ありげな内の体途では  
いかゞと用水の蔭に隠れて閉居たる  
とは知らずして治兵衛は手を突御立  
腹の段は御尤おさんが申は皆むだ  
事私心に存せぬ事此儘濟せて下さ  
れと詫れど附ずイヤならぬはい。何  
にも云ふ事聞事ないはい。おさん戻  
せば事はすむが併拵へおこせし道

具衣裳改めて封付んと立上ればおさ  
んは驚きア、コレと、襟衣裳道具も  
揃ふてあるエ、モウ改めるには及ば  
ぬとかけふさがれば、つき飛しぐつ  
と引出しコリヤどふじやと一重二重  
引出しの數もありだけ押入迄底を敲  
いて五左衛門口あんぐりと押入物指  
にもさゝれず言葉さへ屢し呆れて居  
たりしが治兵衛とつくと心を定めコ  
レ勇殿此五十兩は女房おさんが衣裳  
道具のかはり不足にはあらふが持て  
ござれエ、ハ、ハ、ハ、そふはかいへ  
、、、そふはかいハ、ハ、ハ、イヤ  
又どふ云ても大身体じやつてのがこ  
のしだらを見るからは、いよく娘  
は連て歸サアくうせふと引立れば  
マアく待て下さんせくいなアモ  
あゝ云ひ出してはきかぬと、様わた

しやマア歸ります云迄はないけれど  
勘太郎が事々を頼みますぞへ朝飯  
前に忘れずとなナソレ柔山の丸子  
く呑して下さんせへム、氣遣ひ仕  
やんなマア思ひも宿らぬ今此時義と  
んと心も落付ねど。そんなら暫く別  
れて居よ舅殿も娘の事まんざらむご  
ふもさつしやるまいツイまた戻りや  
る様に成ぞいのアイくくくくく  
コレ申治兵衛様必ず短氣の出ぬ様に  
エ、小面倒な暇ごひサアきりく歩  
めと引立る聲に目覺す勘太郎か、様  
かゝさんのふを開捨に後に見捨る子  
を捨る數に夫婦の二股竹永き別れと  
ハア出て行、しほれく後影見送り  
りく小かげより小春は内へ駈入ば  
ヤアそなたは爰へどふしてと尋る内  
にも稚子がかゝ様のふとしたふ子を

見るに二人はいとど猶ひくずをれ抱  
しめ透せば。すやく稚子を。いぶ  
りながらもくどき言エ、ツウともふ  
何から云ふぞ治兵衛様此間も會根崎  
で相想盡しな悲し別れ思ひ切ては  
ゐるけれどあの太兵衛に身うけしら  
れては所詮生てはいぬ覺悟此世の名  
残りに。たつた一目と來事は來ても  
折あしく立開した内の様子あれ程貞  
女なおさん様にあふぎの別れさせま  
すも皆私から起つた事コレ勘忍して  
下さんせくサイノ眞實な入譯を開  
ば開程此身の誠りあの様な女房が三  
千世界にあらふかいのふ此言譯には  
そなたもおれもスリヤこな様も覺悟  
極てエ、忝ふござんすと抱しめた  
るないじやくり胸とくくに云せけり  
高砂や此重箱に餅入て片言まじり。

あほふの三五郎札に乗し三ツ具足兩  
手に抱へ二人が眞中サアくく氣  
疎い物に成たじやないかへアノさつ  
きにおゑ様の云んすにはコリヤ三五  
郎やおれが留守になつたら大かた小  
春様がござんす程に。そふしたらア  
ノ旦那様とアノソレいまのム、祝言  
さすのじや我を頼と云ておかんした  
はいな、そこでおれが思ひつきじや  
花瓶の松に鶴龜酒の取りたがなかつ  
たさかいで水を銚子に入て來た媒介  
役のエ、おれ様じやコレ禮には好の  
虎屋まんぢうコレ今からあほふと云  
んすなへくサアく早ふ呑んせ  
くハ、ア二人ながら泣んすア、コ  
レないのくようござんすかハア扱は  
コリヤ婿し涙じやのアイノこな様が  
云んす通り婿し涙がくこぼれたは

いのふ。去ながら治兵衛様と祝言してはなどふもおさん様へエ、何のマア濟ぬ事はござんせぬはいのおお様は出しがらに成て是ほど味の鯉節をお前にやらんす事じや物志を無足にせずときりく春でさゝんせいのくいのふム、コレヤ三五郎が云通り祝言じやと思へば義理もあるが、互に末期の水盃ムさらばお酌を申さふかい。涙ながらに取上げる酒と水とはかはらけの土になる送葬禮の一本花や鶴龜の蠟燭立も消る身と思へばいと胸せまるサアく目出ふなつて来たワイエ、誰ぞマア諸唄がこいでなど見るや外面へ四ツ子の墨の衣に、わらじがけ安養寺尼寺常念はつちソリヤコン來たいとおほふはかけ出抱て這入のを顔見て恟驚やお末

じやないか。わりや一人戻つたか。そふしてマアかはつた風をしておるなアイぢいさんにこんな美しい着物仕てもらふた、餘り此べは白いによつて何やらたんと書て下さつた此書たのを。とゞ様や伯母様にちやつと見せてこいと云て祖父様が門口迄つれて来て下さつたはいのふヤアと二人は立寄てあたふた脱す墨染の下には何か白無垢におさんが筆のちらし書、エ、ナニく涙ながらに一筆しめしまいらせ候エ、アハ、さき程父様連立歸られ候節小春様御忍ばせの委確に見請候へ共御存の譯合故御目もじも成がたく書残し申上まいらせ候ア、コレ治兵衛様一寸マアわたしにも讀まして下さんせくいなア、エ、ナニくとかく連

合の命が助けたさ小春様へわりなきお願ひ申上候ひしにお開届給はる嬉しき海山にもかへまほしく何ぼう忝ふ存上まいらせ候エ、この御恩を送り候には末々お二人を御夫婦となしまいらせ候くよりほかなくと存じ候エ、その上父様の眞實をきゝ我がことはこれ迄の縁と諦めまいらせ候又お末ことはこなた乳にて育て申べく候勘太郎が事を小春様へくれくも頼上まいらせ候エ、コリヤマア何の事じやぞいのなソリヤ聞へませぬはいなおさん様私しやお前からお禮請る覺はないコリヤマア私を術ながらすかいなくくコレイナアコレ治兵衛様どうぞまあおさん様を呼戻して下さんせくく立たりゐたりうろく

と譯も涙にくれ居たる治兵衛は又も引よつてエ、ナニ舅五左衛門申入候エ、アの舅親父の思知ずめうぬがろくな事書おる物でア、コレそのやうに腹をたてずと一寸呼でみやしやんせくなエ、とんともう面倒いエ、舅五左衛門申入候、六年以前あたはぬ銀山にかゝり御損失を掛候處舞舅の由縁を以て證文残らず返し下され千萬忝存じ奉候フ、ン知た事ぢやわい、金子の減少本家への聞を思召それ故の遊女通ひ始め嘘が誠と成は我人若年の時を思ひ出し申候ア、成程エ、先頃娘に右の入譯委細に承知仕候故、輕少ながら金子百五十兩先刻衣裳相改め候節、たんとすの大引出しへ差入置き申候ア、コレ小春く、あのたんとすの引出

し明けて見やサ、、早うしやいのいゝやいの、其下の方ぢやわいのム、ほんに爰に入てござんすエ、あるかエ、右金子を以て小春殿を請出しア、コレ小春一寸マアコレを見やいの、右金子を以て小春殿を請出し長く御添下さるべく候、エ、娘さん事はお末諸共今日尼に致し、コレ小春く、おさんが尼になつたといの、エ、おさんが尼にならしやんした、ら利や何とせふぞいなジャテ、この通りおさんが尼に成ると書いてあるおさん様が尼にならしやんしたらわたくしどうしようく、ぞいなあ、でも、おさんが尼になつたといの、エ、娘さん事はお末諸共今日尼に致し、貞玉智月と法名付天下茶屋尼寺安養寺へ連行先刻下されし

(西曆) 間日一十七、日九月十

社合式株行興竹松 元進御  
合協廣相本日大 醫者協

# 場来阪大主カ様相大京東



一均銀十五 等四三二 は日初  
(〇三銀小)

四 三 二 一 醫御  
小 小 小 小 料御  
物 物 物 物 料御  
五 五 五 五 〇五  
〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

業老古老美俊強無  
大 大 大 大 大 大  
師 師 師 師 師 師  
旭 旭 旭 旭 旭 旭  
龍 龍 龍 龍 龍 龍  
鏡 鏡 鏡 鏡 鏡 鏡  
清 清 清 清 清 清  
双 双 双 双 双 双  
武 武 武 武 武 武  
男 男 男 男 男 男  
玉 玉 玉 玉 玉 玉  
水 水 水 水 水 水  
葉 葉 葉 葉 葉 葉  
藏 藏 藏 藏 藏 藏  
川 川 川 川 川 川  
昇 昇 昇 昇 昇 昇  
岩 岩 岩 岩 岩 岩  
山 山 山 山 山 山  
川 川 川 川 川 川  
錦 錦 錦 錦 錦 錦

五拾兩は二人の者の飯料即寺へ詞堂に上申候皆迄讀ず兩人はわつと斗に聲を上そりや朋愆なおさん様是まで愠氣もなされずに逢して給はる其御恩聞入たるがかせになりこんな事なら其時になぜそふ云ては下さんせぬコレナア申治兵衛様おさん様を呼戻し千年も萬年も添とげて下さんせ此子は可愛エ、マアないかいな見れば見る程いたいけな愛にこぼるゝ稚子の乳房にはなるゝいちらしさ孤子となしたるは皆私からおこつ事勘忍んと斗にて取亂したるわび涙理か、せめて哀れなる。折からうそ

言云にや及ばぬ是迄重々意趣ある治兵衛めぶち殺して腹いよと双方よりぶちかゝる利腕掴んでコリヤ〜三五郎〜小春に怪我をさせぬ様働け働けヲツトまかしよと箒の助太刀あなたこなたをちら〜と見る目あやふく氣をひやすいらつて打込善六太兵衛折よくはづせば二人はどし打そりや治兵衛めが切おつたと、わめけばぜひなく乗かゝり日頃の意趣ととゞめの刀コリヤ〜三五郎よ〜お末を連て奥へ行〜コレ小春〜コ、おじやエ、なんにもこはい事はな

はにり歸御の座樂文  
いさ下り寄立御非是

堂食・茶喫・子菓

店子菓洋家二不

〇一〇四・二七南電 筋橋齋心



釣 女

太 郎 冠 者  
 美 女 名  
 大 名 女 名  
 豊 竹 和 泉 太 夫  
 鶴 澤 友 衛 門  
 野 澤 喜 代 之 助  
 鶴 澤 一 郎 右 衛 門

大 名 吉 田 玉 幸  
 太 郎 冠 者 吉 田 榮 三  
 醜 女 吉 田 紋 十 郎  
 美 女 桐 竹 光 之 助

人 形

新 曲 釣 女

榎茂都陸平 振附

抑是は猿樂の昔よりして其業の可笑といひし狂言師名に大藏や鷺流の容を寫す釣女大名へかやうに候者は此所の大名でござる。ヤイ、太郎冠者あるか、太郎へハア、大名へ有るか、太郎へハア、御まへに大名へ居たか、太郎へハア、大名へねんのう早かつた、汝も知る如く、此年迄定まる妻がない、承れば、西の宮の恵比壽三郎殿は福者と申事、是へ参り妻を申受けうと存ずるが、何んとあるぞ、汝供をせい、太郎へ誠、に仰せの如くでござる、西の宮の木びす三郎殿へ参るがよふござりませう、私も定まる妻がござりませぬ、都手ながら申受ませう、大名へ扱、

己はそつじな事をいふものじや、及び三郎殿とこそいへきびす三郎と申事があるものではない、太郎へハテ繪にかいた折は、及びす三郎と申す木で造つた折は、木びす三郎と申す、大名へなう、汝は物知りでおじやる、某は道不案内じや、程に名所舊蹟を語り聞せよ、太郎へ畏つてござる、大名へ去らば、急いで参まう、サア、来い、太郎へ参ります、イヤなう、頼ふたお方先参る程に、是がはや、小唄に調ふ、奈良法師行も、戻るも、心のとまるも、山崎の、女郎と、遠樂の、長枕結ぶ縁しの、尼が崎、大名へアハ、、ヤ面白、シテ向ふに見ゆる、山は何山じや、太郎へハテ、あれは山でござる、大名へ、愛な申か、山は山じやが、何と申、太郎へハ、ア、何山はエ、山で

ござるヲ、それ〱あんの山から  
こんの山へ飛で出たるは何者ぞ頭に  
ふつふと二ツ細ふて長ふてりんとは  
ねたをちゆつとすいた 太郎〱兎じ  
や 大名〱何を申ぞシテ西の宮はまだ  
か 太郎〱最早此森の内でござります  
る 大名〱去らば參詣を致そうてうず  
〱太郎〱ハア 大名〱先鱧口に取つ  
かふぢやぐわん〱いかに申上候  
〱我此年迄無妻なり 大名〱三郎殿の  
利益にて定まる妻をさづけたまへ  
授けたまへと一心こめて伏拜む 大名  
〱ヤイ 太郎冠者汝もおがめ 太郎〱畏  
つてござるぢやぐわん〱いかに木  
比壽三郎殿へ申候〱我も定まる妻は  
なし似合相應美しき妻をお授け〱  
と三拜九拜したりける 大名〱ヤイ太  
郎冠者今宵は通夜をせう汝もまどろ

め 太郎〱畏つてござる 大名〱アラと  
うとや〱内陣の内ぞゆかしき我  
妻を千代と契らん手枕の袖を覆ふて  
まどろみしがほどもあらせず夢さめ  
て 大名〱ヤイ〱お告があつた〱  
汝が妻になる者は西の門の一の階に  
あらう程に連れて歸れとお告が 太郎〱  
是はいかな事私がお告も其通り 大名  
〱いそいで參らう〱 太郎〱參りま  
す〱〱勇み悦ぶ足元に落たる竿を  
取上て 大名〱ヤイこれはいかな事妻で  
はなふて竹の先に糸が附てあるこれ  
はなんであらうぞ 太郎〱ハアふしぎ  
なお告でござりますな 大名〱イヤ是  
はさとつた惠比壽殿はふだん釣竿を  
放さず釣斗りしてござるによつて此  
針で妻をつれといふ事であらう、先  
急ひで釣ませうエイ〱〱釣るよ

〱神の教への釣針をおろしめよ  
き妻をつろうよ〱合〱針をおろせ  
ば合〱針をおろせば 大名〱ヤイ〱  
太郎冠者かゝつたわ〱 太郎〱何か  
ゝりましたか 大名〱逆も〱おもい  
女ぢやチャツト來て腰を取れ 太郎〱  
心得ました 大名〱ハアテそれがして  
はないお妻さんの腰を取れ 太郎〱心  
得てござるふしぎやな氣高き女を釣  
上て 大名〱アラ有難や扱も能い妻が  
かゝつてござるうれしや 太郎〱何が  
扱お悦びでござる 大名〱これ〱そ  
なたは定まる妻じやによつて目を掛  
てやる程に夫を大事にしませうぞヤ  
小野の小町か楊貴妃かアラ美や〱  
太郎〱イヤゆく道々こつそり樂まう  
と春中へ入て來た此吸筒お二人さま  
の三々九度はにて目出たう御祝言、

大名「ヤこれは一段の事じや、サア  
 くつげ」太郎「心得てござる大  
 名「先女子の方よりさしませい 太郎  
 「心得ました 女「申し我夫必ず見す  
 て、下さるな 大名「なんの見すて、  
 よひものか 女「ヤ、嬉し 大名「太郎  
 冠者祝して一ツうたふてくれ 太郎「  
 畏つて候「高砂や此盃が二世  
 の縁神の御前で祝言は三郎さまがお  
 媒人よしそれとても浮氣心が有なら  
 ほんに罰が當るであるぞいな必ず見  
 捨て下さるな、やいの」と寄添ば  
 「傍に閑居る太郎冠者氣をのみあせ  
 り 太郎「ヤ申し「其釣竿を私にお貸  
 下され見事釣て見せませう 大名「早  
 ふつれ」 太郎「イヤ釣る段ではご  
 ざらぬまづお二人様はそれにて御見  
 物下さりませマヅ」

「釣るよ」釣る物は何々鯛に  
 鯉に恵方杓に撞鐘信田の森の狐にあ  
 らぬ釣針をさげておろして二十二相  
 揃ふた十七八を釣ろうよおかつさん  
 をつろうよ「餘念もながき鼻の下、  
 「當るぞ」どっこいメたと引上  
 り、被衣目深にかつぎし女アとう  
 とや掛つたい」サア「こちらへ  
 ござれ嬉しや」サア「是から  
 は三々九度の盃じやこれへござれ  
 何も恥しい事はないそなたと夫婦に  
 なるならば春は花見夏は涼み秋は月  
 見の酒盛に冬は雪見のちん」鴨天  
 にあらば比翼の鳥地に又あらば連理  
 の枝かならずそもじはかはるまいな  
 悪女「なんの變つてよいものかな 大  
 名「サテもよい妻を釣た物かなヤイ  
 」 太郎冠者氏兩人のお妻様に汝が

國の舟歌を歌つて聞かしてやれ 太郎  
 「畏まつてござる 大名「次手に手振  
 りもして見せい 太郎「ヤア心得まし  
 た、沖で峰見りや三上の櫻とサ、枝  
 をこんきりこつと、どうらんにつて  
 忍び殿様にぶらんと提げさせふか  
 いな、花にようにたサモ風俗はよう  
 そろ、そつとせいなびかんせ 大名「  
 サテ」面白し事ぢやヤイ」 太郎  
 冠者汝が妻も被衣を取らしませ 太郎  
 「なにがさて餘りの嬉しさに顔を見  
 る事を忘れておりました、サラパー  
 寸と御面像を被衣をとればこはい  
 かに鱧に等しき醜女ゆゑ 太郎「ヤア  
 ワゴリヨは鬼か化物かなう消てなく  
 なれ」 悪女「なう」我夫今おつ  
 しやつた楽しみは嬉しふて」わた  
 しや忘れはせぬわいなア 太郎「ヤレ





# 毎度御愛顧を蒙り厚く御禮申上ます

本日は有難う御座居ました。開場毎に皆様は御満足して頂けるやう、御期待に反かぬ様一同努力致して居ります。

**文楽座御使用に就て** 當座を各種の御催し、例へば演劇公演、

邦楽會、舞踊公演、お渡り温習會、披露會、祝賀會、慰安會に御利用下さる様御願ひ申上ます。

**諸種の團體御觀劇會** は直接御申込み下さいます様御電話にて

御一報下されば早速係員を差遣し凡ての御相談申上ます。

**お食事**は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座います。

**賣店**は 二階東側と二階兩側及休憩所に御座います。お菓子、番

附、雜誌、お煙草その他募間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

**お化粧とお手洗** 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一

階と二階に御座います。

**お煙草**は 一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ

此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

**御携帶品**は 正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはな

るべく御預り所へ御預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります

からそれへお願ひいたします。御歸りは混雑致しますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます

**お出口**は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。

黒札は正面入口東側でお渡し致します。

**貴重品**は 各位にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひ

ます。

**お場席券**は 各自にお持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附い

て居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

**案内人**へ 其他の一般従業員に不行届の點は御遠慮なく事務所まで

御注意の程お願ひいたします。

**場内にて** 寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

**出演者** 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて

相助めますから豫め、御諒承願ひます

**御休憩の間**は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座りますか

ら御使用下さい。ムシタオルはレットローション使用。

四ツ橋 文楽座

營業主任

昭和十二年十月一日印刷

昭和十二年十月三日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹興行株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八

編者 松竹興行株式會社大阪支店  
發行人 鳥江 鏡也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二

印刷所 永井日英堂印刷所

文樂座南一食堂

御食の事用は一幕前に御下命賜はば至極御便利で御座います



大阪で一番早起きの南一

大阪回ッ格  
南一温泉料理

御宴會にも  
御家族連にも

料理は

南一

文樂座南一食堂

電話南

①

三三三七  
三三三〇  
四二一一  
番番番番

